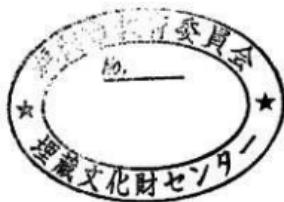


板付周辺遺跡調査報告書

(7)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第65集



1981

福岡市教育委員会

板付周辺遺跡調査報告書

(7)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第65集

1981

福岡市教育委員会

0347

0628

0629

0630

板付周辺遺跡調査報告書(7)正誤表

頁	行	誤	正
図版日次	PL.5 2	SX02 (玄室から奥門部をのぞむ)	SX03 (玄室から奥門部をのぞむ)
"	PL.6 1	SX03 (玄室より堅坑部をのぞむ)	SX02 (玄室より堅坑部をのぞむ)
2	15	各れも	何れも
5	8	各れも	何れも
8	23	SD01 → SX02 → SD02	SD02 → SX02 → SD01
9	21	平坦	平坦
12	19	"	"
"	27	表土・各遺物は	表土・各遺構出土の遺物は
17	15	杯	杯
19	18	柄穴	納穴
"	21	柄穴状	納穴状
20	31	6類(16)	b類(16)
22	19	平坦	平坦
"	28	45は小楕で	44は小楕で
24	11	60は黄灰色の	61は黄灰色の
"	12	61はやや粗い	62はやや粗い
"	13	62は胎土が	63は胎土が
28	7	新紀ローム	新期ローム
30	9	考古学な	考古学的な
35	4	柄穴	納穴
40	18	(N-4)	(N-1)
44	14	(PL.23-e)	(PL.24-e)
47	8	17世紀前半	17世紀後半
PL.5	2	SX02 (玄室から奥門部をのぞむ)	SX03 (玄室から奥門部をのぞむ)
PL.6	1	SX03 (玄室より堅坑部をのぞむ)	SX02 (玄室より堅坑部をのぞむ)
PL.24	説明	ピット1(60)	ピット2(60)
"	"	ピット2(55)	ピット3(55)
"	"	ピット3(f)	ピット4(f)



序

福岡市教育委員会では、板付周辺地域の開発に伴う事前の緊急調査を国庫補助事業により、昭和48年度から継続して実施し記録保存につとめています。

本年度は諸岡台地の調査により中世の溝・地下式横穴・近世の建物が検出されるなどの成果をあげることができました。

本報告書が市民各位の文化財に対する理解を深めるために役立つとともに学術研究の分野で活用されることを願うものであります。

なお、調査に当り助言をいただきました調査指導員の先生方をはじめ、関係者各位の寄せられました多大のご協力に対し、心から感謝を申し上げます。

昭和56年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

例　　言

- 1 本書は、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて1980年度に実施した史跡「板付遺跡」周辺地区ならびに諸岡遺跡周辺地区の緊急発掘調査の報告である。
- 2 本書の執筆は次のとおりである。
 - I柳沢一男
 - II横山邦継
 - III・IV塩屋勝利・田中寿夫
 - V柳沢
- 3 本書に掲載した写真・挿図は、各地点の執筆担当のものが撮影・作成した。
- 4 本書で使用する遺構名称は次のとおりである。
 - S A櫛
 - S B掘立柱建物
 - S D溝
 - S K土塁
 - S Xその他
- 5 本書で使用する方位はすべて磁針方位で真北との偏差は西偏6°40'である。
- 6 本書の編集は、各担当者が行い、柳沢がまとめた。

本文 目 次

	頁
序	
I 本年度調査区と調査経過	1
II G-5 b 地点	2
1 調査概要	2
2 遺構と遺物	2
3 小結	5
III 諸岡 I 区	8
1 調査概要	8
2 検出遺構	9
3 出土遺物	11
4 小結	12
IV 諸岡 J 区	15
1 調査概要	15
2 検出遺構	17
3 出土遺物	21
4 小結	27
V 諸岡 K 区	28
1 調査概要	28
2 検出遺構	28
3 出土遺物	36
4 小結	46

図 版 目 次

P L. 1 G-5b地点	
1 調査区全景（西から）	
2 K01出土状況	
3 K01	
P L. 2 諸岡 I 区	
1 調査終了全景（南々西から）	
2 調査終了全景（北から）	
P L. 3 諸岡 I 区	
1 SD01およびSX02（南から）	
2 SX01（西から）	
P L. 4 諸岡 I 区	
1 SX01と柱穴群（南から）	
2 SX02（南西から）	
P L. 5 諸岡 I 区	
1 SX02（南から）	
2 SX02（玄室から狭門部をのぞむ）	
P L. 6 諸岡 I 区	

- 1 SX03 (玄室より豎坑部をのぞむ)
 - 2 SX03豎坑部 (南から)
 - 3 SX03 (西から)
- P.L. 7 諸岡 I 区 出土遺物
- P.L. 8 諸岡 J 区
- 1 調査前現況近景 (東から)
 - 2 調査終了全景 (東から)
- P.L. 9 諸岡 J 区
- 1 調査終了全景 (東から)
 - 2 調査終了後全景 (南から)
- P.L. 10 諸岡 J 区
- 1 井戸および柱穴群、SD01 (北から)
 - 2 SD01、SE01~05 (南から)
- P.L. 11 諸岡 J 区
- 1 SD01土層断面 (北から)
 - 2 SE01 (東から)
- P.L. 12 諸岡 J 区
- 1 SE02 (東から)
 - 2 SE03・04 (東から)
- P.L. 13 諸岡 J 区
- 1 SE04木製桶出土状況
 - 2 SE04粹組状況
- P.L. 14 諸岡 J 区
- 1 SK01 (東から)
 - 2 SK02 (北から)
- P.L. 15 諸岡 J 区 出土土師器・瓦器・白磁
- P.L. 16 諸岡 J 区 出土青磁・陶器・染付
- P.L. 17 諸岡 J 区 出土石製品・瓦・木製品
- P.L. 18 諸岡 K 区
- 1 調査区全景 (調査前・南東から)
 - 2 調査区全景 (調査後・東から)
- P.L. 19 諸岡 K 区
- 1 掘立柱建物群 (北から)
 - 2 掘立柱建物群 (南から)
- P.L. 20 諸岡 K 区
- 1 SE01・02 (南から)
 - 2 SE03 (北から)
- P.L. 21 諸岡 K 区
- 1 SD03・04 (南から)
 - 2 SD01 (東から)
- P.L. 22 諸岡 K 区 出土遺物 I
- P.L. 23 諸岡 K 区 出土遺物 II

P.L. 24 諸岡K区 出土遺物III
P.L. 25 諸岡K区 出土遺物IV

挿 図 目 次

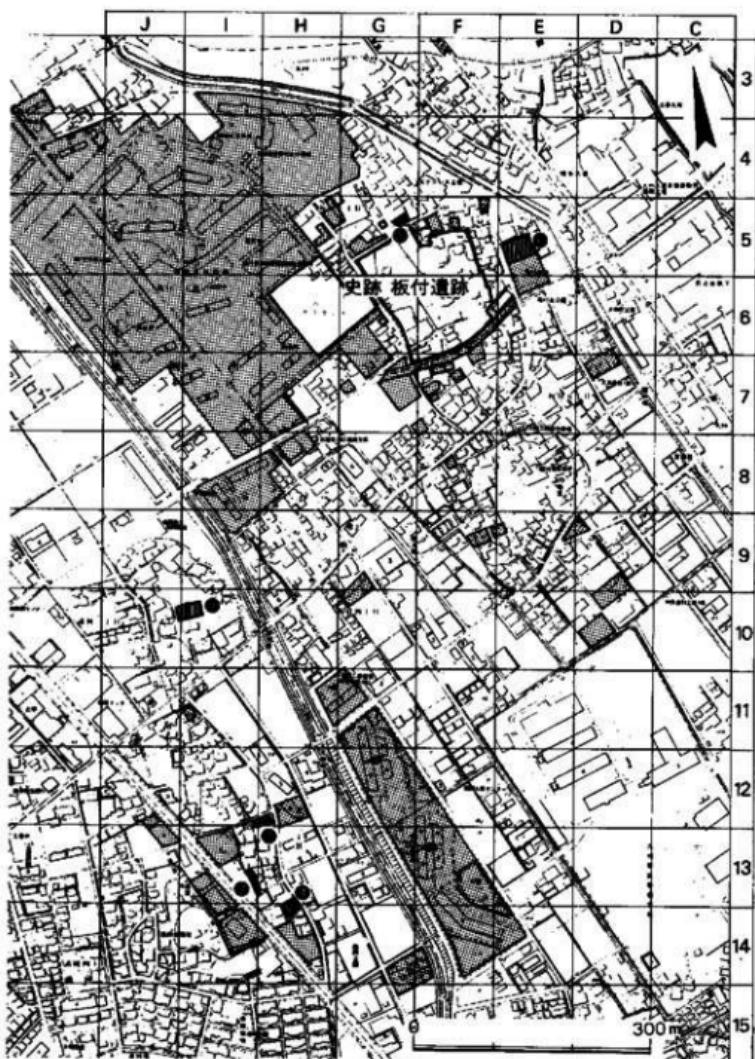
頁

Fig. 1	調査地区位置図(%)	2
Fig. 2	G-5 b 地点東西土層図(%)	3
Fig. 3	G-5 b 地点位置図(%)	3
Fig. 4	K01壺棺墓実測図(%)	4
Fig. 5	K01実測図(%)	4
Fig. 6	S B01実測図(%)	5
Fig. 7	諸岡遺跡の分布と調査区位置図(%)	6
Fig. 8	諸岡遺跡造構配置図(%)	7
Fig. 9	諸岡 I 区地形図(%)	8
Fig. 10	諸岡 I 区造構配置図(%)	9
Fig. 11	諸岡 I 区地下式横穴実測図(%)	10
Fig. 12	諸岡 I 区出土ナイフ形石器実測図(%)	11
Fig. 13	諸岡 I 区表土層出土遺物実測図(%)	13
Fig. 14	諸岡 I 区各造構出土遺物実測図(%)	14
Fig. 15	諸岡 J 区地形図(%)	15
Fig. 16	諸岡 J 区造構配置図(%)	16
Fig. 17	諸岡 J 区溝(S D01)実測図(%)	17
Fig. 18	諸岡 J 区井戸(S E01-03・05)実測図(%)	18
Fig. 19	諸岡 J 区井戸(S E04)実測図(%)	19
Fig. 20	諸岡 J 区土塙(S K01・02)実測図(%)	20
Fig. 21	諸岡 J 区出土土師器・瓦器・土師質土器実測図(%)	21
Fig. 22	諸岡 J 区出土土師質土器・瓦質土器・白磁・青磁実測図(%)	23
Fig. 23	諸岡 J 区出土青磁・陶器実測図(%)	25
Fig. 24	諸岡 J 区出土染付・石製品・瓦・木製品実測図(%, %)	26
Fig. 25	諸岡 K 区位置図(%)	29
Fig. 26	造構実測図(%)	30-31おりこみ
Fig. 27	掘立柱建物実測図I(%)	31
Fig. 28	掘立柱建物実測図II(%)	32
Fig. 29	井戸S E01・02実測図(%)	34
Fig. 30	S E03井戸枠実測図(%)	35
Fig. 31	出土遺物実測図I(%)	37
Fig. 32	出土遺物実測図II(%)	39
Fig. 33	出土遺物実測図III(%, %)	43
Fig. 34	出土遺物実測図IV(%)	44-45おりこみ

表 目 次

頁

Tab. 1	諸岡 J 区造構別出土遺物一覧表	27
Tab. 2	諸岡 K 区掘立柱建物計測表	33



- ①板付G-5b地点 ②諸岡I区 ③諸岡J区 ④諸岡K区 ⑤諸岡館址 ⑥板付E-5b地点

Fig. 1 調査地区位置図 (1/2000)

■	昭和55年度調査区
▨	既調査区

I 本年度調査区と調査経過

昭和55年度の発掘調査は、宅地造成・住宅建築などに伴う緊急調査として、下記の6地点について実施した（Fig. 1）

調査地区	調査地区地籍	調査対象面積	調査面積	調査期間
1 G-5b地点	博多区板付2丁目7-24	191.10m ²	30m ²	80.2.10~2.12
2 諸岡I区	諸岡2丁目9-25	381.58m ²	375m ²	80.5.29~6.19
3 諸岡J区	諸岡2丁目9-1	214.87m ²	172m ²	80.5.12~5.31
4 諸岡K区	諸岡2丁目9-11	372.65m ²	285m ²	80.7.15~8.12
5 諸岡館址	諸岡1丁目17-31	330m ²	330m ²	80.11.18~12.12
6 E-5b地点	板付2丁目13-14	1,130m ²		81.2.9~

G-5b地点 史跡指定地の北西に接し、G-5a地点の東に位置する。水田に使用されていたため、遺構面の削平が著しい。掘立柱建物、弥生後期終末の壺棺が検出された。

諸岡I区 諸岡丘陵の東裾上部に位置し、昭和47年に調査したH区の南に接する。明確な包含層はみとめられないがナイフ形石器が出土している。その他、中世の溝、柱穴群、地下式横穴などが検出された。

諸岡J区 諸岡丘陵の東裾端部で沖積地に接する位置にある。中~近世にわたっての溝、井戸、土塙などが検出された。

諸岡K区 昭和54年度調査のG地区の北に接し、丘陵東裾にあたる。調査区は、室町時代後半期の地下げ塹地がみとめられる。古代末の溝・井戸、中世末~近世前半にわたっての掘立柱建物、樋、溝、井戸、土塙などが検出された。

諸岡館址 諸岡丘陵北端の舌状台地端部に築造されている。文献に見えないため、年代、性格は不明である。幅5m、高さ1mほどの土塁が、南北（西辺のみ）60m、東西（南辺のみ）20m残存している。調査は、その南辺1/6程度をおこなった。その結果、土塁の両側には幅2mの溝がめぐり、その心々幅は約6mを測る。また弥生時代の遺構も重複しており、前期後半の貯蔵穴が検出された。

E-5b地点 昭和53年に調査したE-5a地点の北側に接し、板付台地の東端部にあたる。台地端部の地山上には夜白・板付I式の包含層が検出されている。現在調査中。

調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会文化課 文化部文化課埋蔵文化財第2係

事務担当 古藤国生

発掘担当 横山邦輔（G-5b地点） 塩屋勝利・田中寿夫（諸岡I・J区） 柳沢一男（諸岡K区） 柳沢・二宮忠司（諸岡館址・E-5b地点）

調査補助 吉原流雄 小林義彦 渡辺和子



II G-5b地点の調査

1 調査概要

G-5b地点（博多区板付2丁目7-24）は個人専用住宅建設のために緊急発掘調査を実施した。（Fig. 3）

調査は対象地が狭少で、排土作業等の条件から約30m²の範囲にとどまった。土層は（Fig. 2）15~20cm程度の旧耕作土直下は青白色粘土（八女粘土、標高9m前後）となり周辺地域で通有の遺物包含層（暗茶褐色粘質土）は過去の削平によって失なわれていた。遺構は弥生時代終末期壇棺1基、擱立柱建物1棟などである。他に径10~30cm、深さ10cm程度のビット26個を検出したが建物としてのまとまりを欠き、時期的に限定できないものであった。

G-5b地点の両側に隣接するG-5a地点では地山面（標高8.5m、鳥栖ローム）上に約30cm程度の遺物包含層（夜臼式土器、弥生中期土器、各種石器類、糸切り土師皿等出土）が残り、遺構としては弥生時代竪穴5基、壇棺墓43基（前期末～中期）、木棺墓13基、土坑墓11基（各れも前中期）、井戸3基（中世～近世）それに近世壇棺墓2基、木棺墓3基などが検出されているが、遺構の上で最も新しい近世壇棺、木棺墓は時代的に寛永年間以降の造営であることが副葬銅鏡から知られ、G-5bを含む一帯の耕地化はこれ以降の時期に行なわれたものであろうか。

以下検出遺構と遺物について説明を加えることとする。

2 遺構と遺物

壇棺墓（Fig. 4・5、PL. 1）

K01（Fig. 4）第1号壇棺は調査区東側に検出された。過去の削平によって墓壠は殆ど完全に消失し、底部付近から胴部にかけての破片が全体の約半分程度残存していた。埋置角度は不詳であるが、棺長軸はほぼN-15°-Wをむいている。

出土壇棺（Fig. 5）棺として使用された壇は口縁および底部を欠損している。半球形の胴部は中位よりやや上った位置を最大径とし、この部分にヘラ状のもので右上りの刻目をつけた平たい突帯を

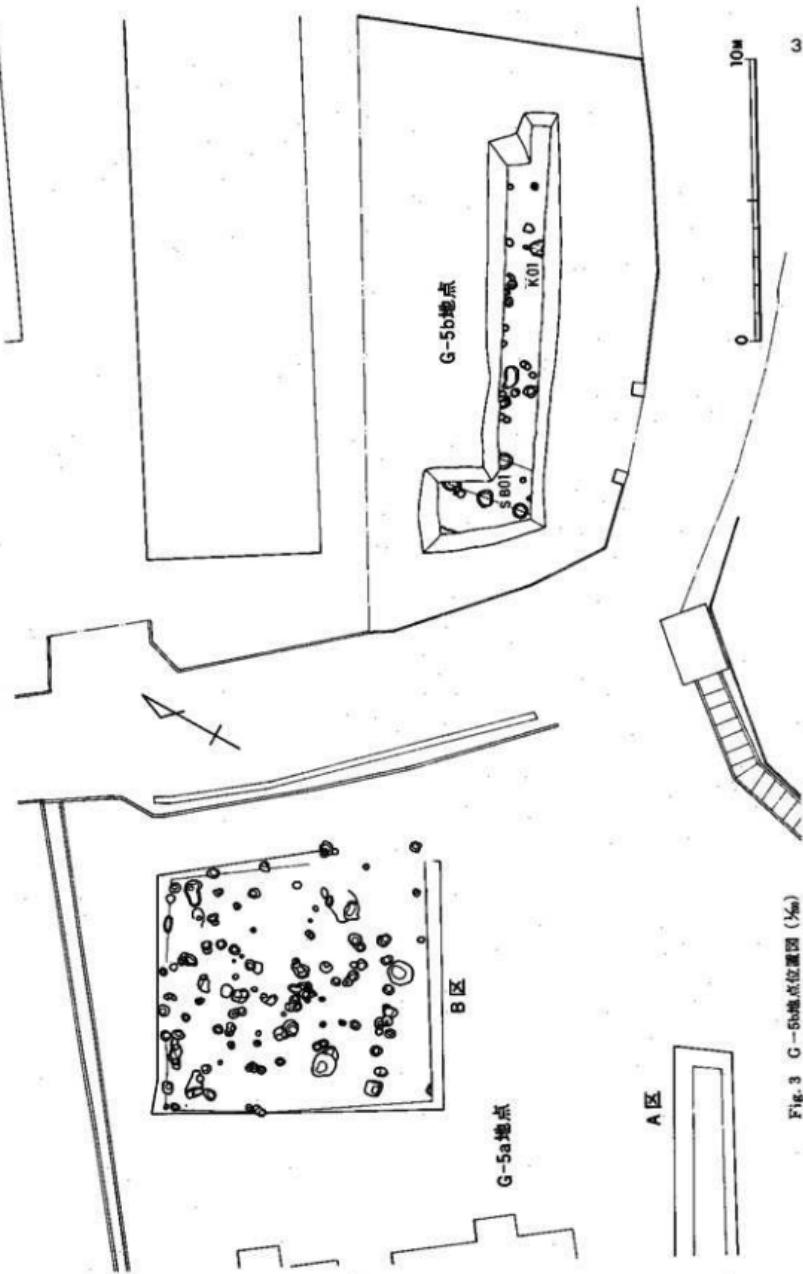


Fig. 3 G-5b地点位置図 (Yn)

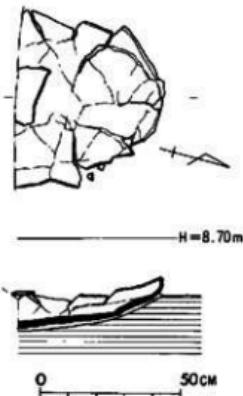


Fig. 4 K01 窯格墓実測図 (5%)

一条過らす。底部は丸底と考えられ、残存部分で器厚3.4cmをこえる分厚いものである。このほか器壁は全体に均一さに欠ける。器色は外面赤褐色を呈し底部付近に径30cm程度の黒斑がみられる。また内面は淡い赤褐色を呈する。器面調整は外面が巾2.7cm程度の板状工具による刷毛目調整を行ない、底部付近は更にヘラ状のものでヨコにナデ調整している。内面は巾2~2.5cm程度の板状工具による荒い刷毛目調整を施す。胎土は小砂粒を含み緻密である。焼成は堅緻である。時期的には弥生時代終末期の所産であろう。

掘立柱建物 (Fig. 6, P.L. 1)

S B01 調査区西隅に検出された掘立柱建物と考えられる遺構で調査区の制約から全掘はできなかつた。従って桁・梁規模は完全に知り得ないが、建物

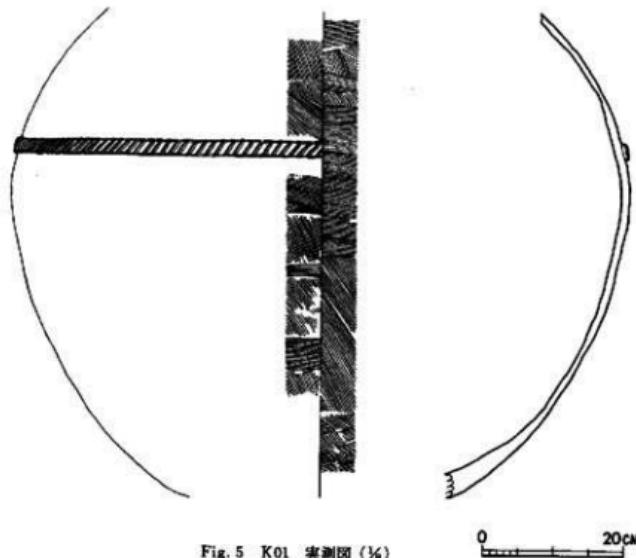


Fig. 5 K01 実測図 (3%)

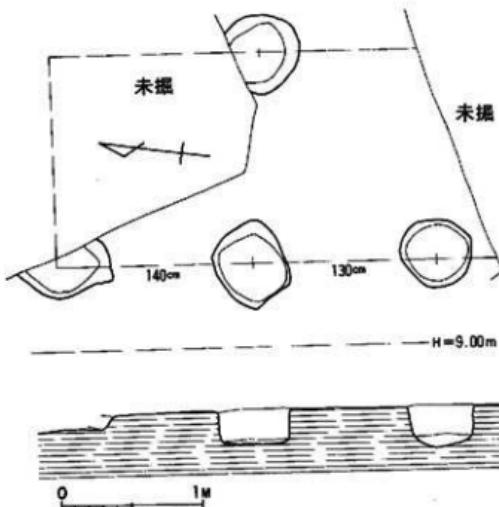


Fig. 6 S B01 実測図 (1/4)

の長軸はN-9.5-Eをとる。桁行2間以上で柱間は130cmである。柱掘方は径50cm、深さ30cmをはかる。また梁行は1間以上と考えられ、柱間は150cmである。本造構は通常の掘立柱建物としては異例に近く、規模的に小さいものである。時期的には柱掘方の覆土中から各々弥生時代中期土器細片が出土しているのでこれ以降という大まかな限定しかなし得ない。

3 小結

G-5b地点の調査は過去の工作によって造構の大部分は失なわれていると考えられた。

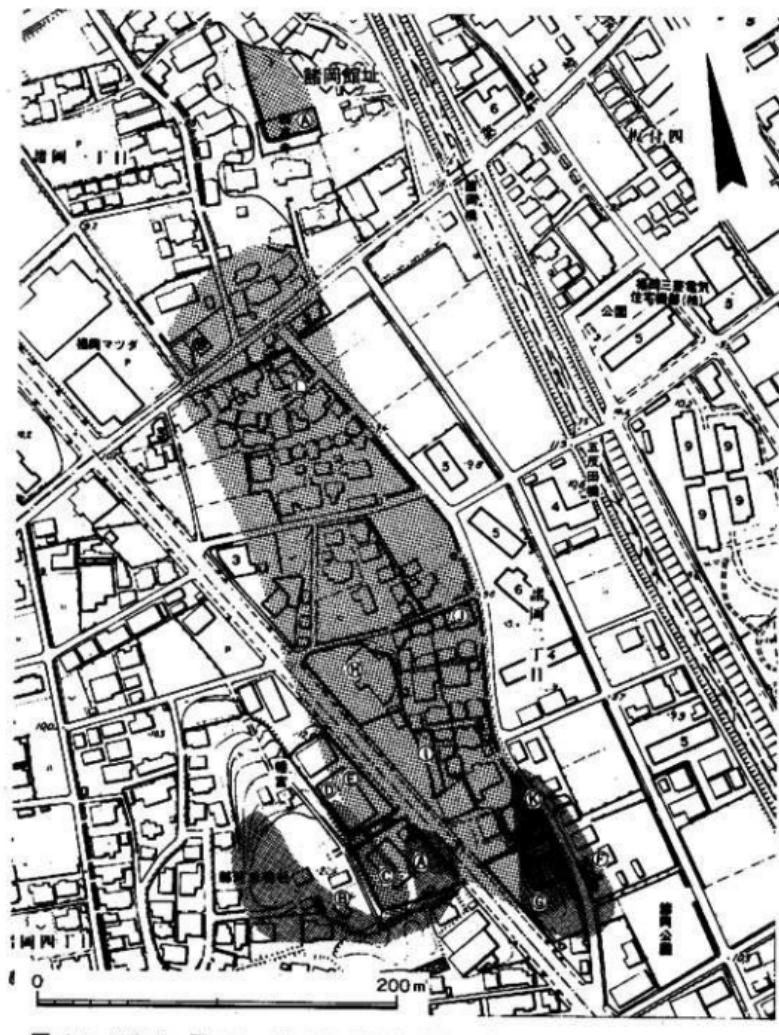
これまで板付丘陵では弥生時代墓地として確実なものは北端部にあたる板付北小学校運動場地点、本地点に隣接するG-5a地点、細形銅剣を出土した田端などであるが、各れも土塙墓、^(註2)木棺墓を含む弥生時代前期後半～中期後半の時期に限られており、後期墓域の一端に触れ得たのは新しい成果である。また掘立柱建物は丘陵上では東側裾部にあたるE-5・6地点で中世^(註4)期のものとされる1×2間の建物1棟が検出されている。今後の調査に期待したい。

註 1 板付周辺遺跡調査報告書3 福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集 1977

註 2 板付一市営住宅建設にともなう発掘調査報告書-1971-1974 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 1976

註 3 中山平次郎「銅鏡・銅剣の新資料」 考古学雑誌第7巻第7号 1917

註 4 板付周辺遺跡調査報告書6 福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集 1980



■ 夜臼一板付Ⅰ式 ■ 板付口式(無文系土器伴出) ■ 塚棺墓(中期中葉-後期) ■ 古代末~中世

Fig. 7 諸岡遺跡の分布と調査区位置図 (X₂₀₀)

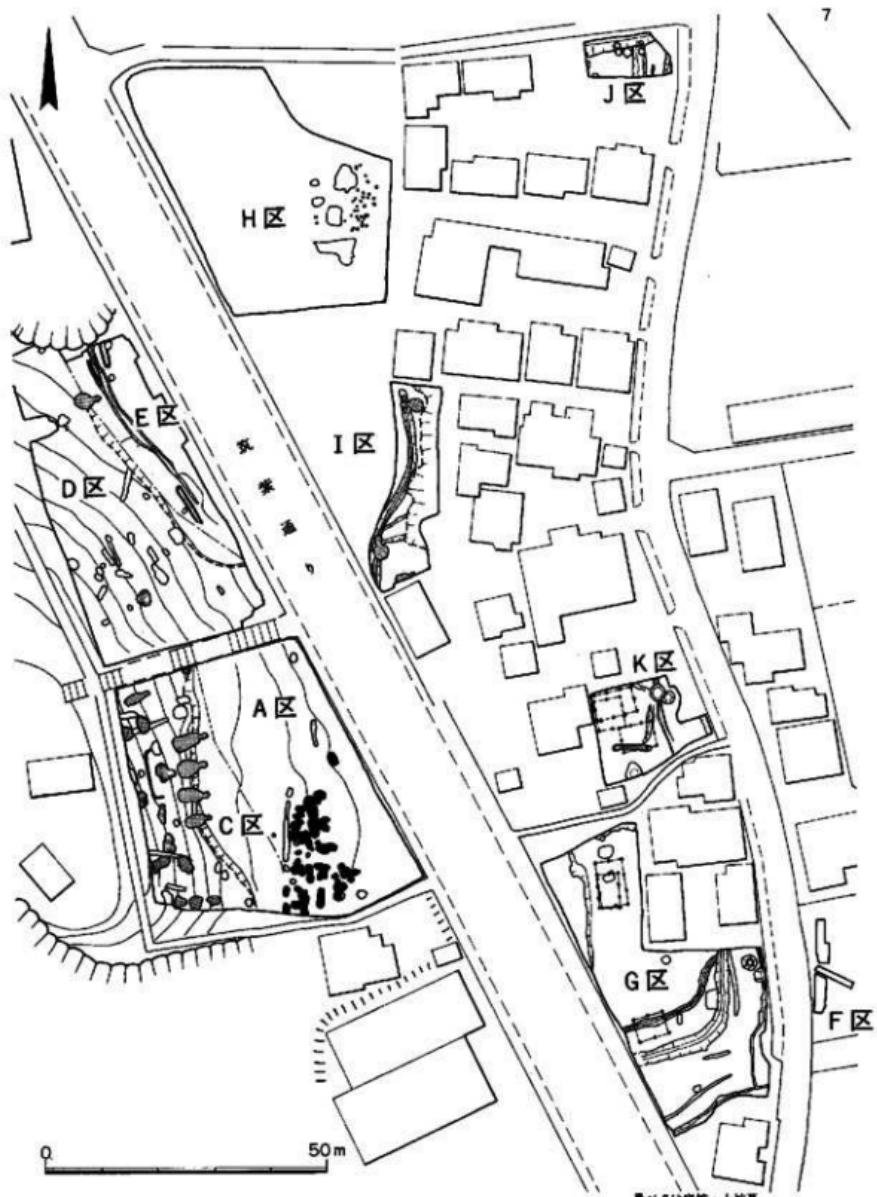


Fig. 8 諸岡遺跡遺構配置図 (50m)

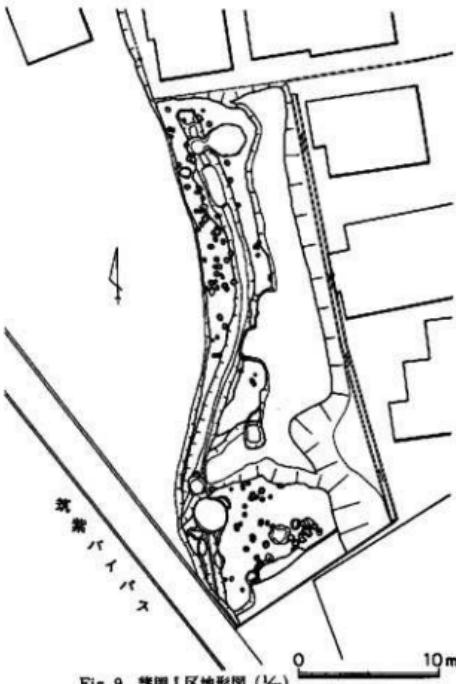
黒ベタは建物・土塁等
白かいドットは無文土器出土土地
黒いドットは地下式横穴

III 諸岡 I 区の調査

1 調査概要

今回調査を行った諸岡 I 区は、諸岡丘陵の緩やかな傾斜面となっている東側裾部に位置しており、1973~74年にかけて調査された諸岡 A ~ D 区とは国道 3 号線バイパスを挟んで相対している。標高 12m 前後を測る当地区の東側は人為的な削平によって切通し状の段落ちとなっており、人家の立ち並ぶ平地との比高差は約 2m である。現状は山林で遺存状況は比較的良かった。

検出された遺構は柱穴状小豎穴 102、地下式横穴（SX）3、溝（SD）2 が調査区のほぼ全域にわたって検出された。柱穴と思われる小豎穴は調査区中央から北側にかけて分布する一群と、南側に集中する一群とにグルーピングできるが、個々の小豎穴間の関連性については明らかにできなかった。地下式横穴はこれまでの諸岡丘陵東側斜面の調査によって 7 基検出されているが、今回の分も含め計 10 基確認されたことになる。これらの地下式横穴は形態上の諸要素をほぼ同じくするが、調査区北側で検出された SX03 の場合、竪坑の平面形が方形をなすなど若干の差異が認められた。時期比定の目安となる遺物の出土は少なく、またいずれも崩壊埋土からの出土のため、造営時期については明確にできなかった。溝は調査区の南北長軸に沿って二本検出された。いずれも緩やかな弧を描きつつ南北に連続すると思われるが両端で削平を受けている。これらの遺構の切り合いからみた先後関係は、SD01 → SX02 → SD02 → 柱穴状小豎穴の一部となる。出土遺物は少ない。SD02 から土師器小片、瓦器片、青磁、白磁、SX02 から青磁、白磁、SX03 から瓦質土器などが出土しているが、いずれも遺構床面からかなり浮いた状況で出土したものである。その他表土層からナイフ形石器、滑石製品、土師器小片などが若干出土して



いる。以下遺構・遺物について記述する。

2 検出遺構

溝

S D01 (Fig. 10, P L. 3) 調査区南端～西側にかけて検出されたもので、土層観察によると、**S X02**崩壊埋土上部を切って掘削されている。溝断面形はV字形で、掘方上端で幅1.10～1.20m、深さ0.56～0.60mを測る。ほぼ南北に長軸をもつ。

S D02 (Fig. 10, P L. 1) 緩やかな弧を描き南北に走る溝で、南側では断面形がV字形を、北側では逆台形をなし、次第に浅くなりつつ削平によって消滅している。南側では溝掘方上端幅1.80m～1.90m、深さ0.65～0.75mで、遺物は埋土上部から出土。

地下式横穴

S X01 (Fig. 11-1, P L. 3・4)

調査区の南端にかかり完掘はしていない。堅坑は推定径約80cmの不整円形、主室は長さ約2.40m、推定幅約1.75mの不整椭円形にそれぞれなる。床面はほぼ水平で平坦な面となっている。壁面は内弯気味に除々にせり上りドーム状をなす天井部へと続く。天井部の高さは復元推定約1.5mほどである。

S X02 (Fig. 11-2, P L. 4・5)

S X01の北西約3.5mの地点に隣接して造営されている。長軸の方向はN-23°40'Wで、**S X01**とはほぼ直角をなす。堅坑は径85～90cmほどの円形、主室は長さ2.61m、幅2.28mの不整円形の平面形をそれぞれもつ。壁面は床面からやや外へ張りだすように立ち上がり床面から50cmほどの位置で緩やかに内弯し

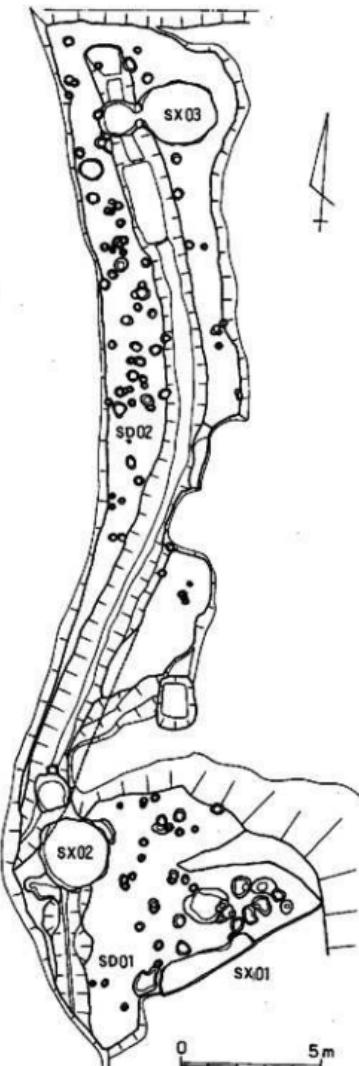
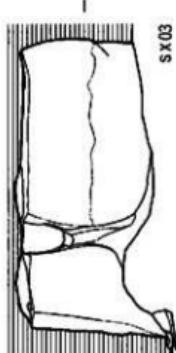
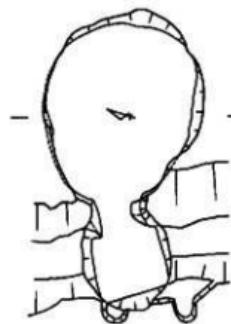
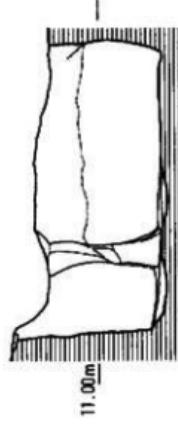


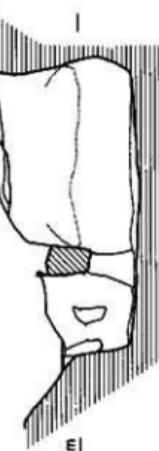
Fig. 10 諸岡 I 区遺構配置図 (3m)

10

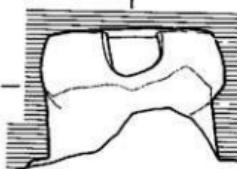
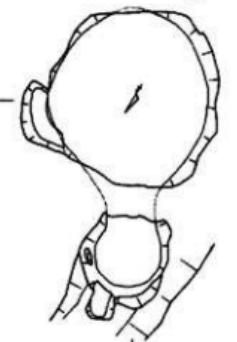


5m

sX01



sX02



12.00m

Fig. 11 諸岡 I 区地下式横穴実測図(1分)

つつドーム状をなす天井部へと続く。狭門部は長さ0.51m、高さ0.61m、幅0.80mを測る。土師器小片2、白磁碗小片4が崩壊埋土から出土。

S X03 (Fig. 11-3, P L. 6) 調査区北側で検出。長軸方向は S-86°10'-W をとる。竪坑は **S X01・02** が円形の平面形をなしていたのにに対して、やや歪んだ方形となっており、また主室の長軸に対して約13°南へずれて配置されている。床面の四隅には、径6~7cmを測るピットがみられたが、これは竪坑掘削時もしくは造営時の壁面崩壊防止のための矢板杭の痕跡かと思われる。主室平面形は長さ2.54m、幅2.15mの橢円形をなす。天井部は **S X01・02** 同様ドーム状をなすと考えられる。土師器小片4、瓦質土器鉢1、砾石1が出土している。

3 出土遺物

ナイフ形石器 (Fig. 12, P L. 7) 黒曜石製。現存長4.3cm、幅1.45cm、厚さ0.65cm。厚手の綫長剣片を素材とするもので、基部の二側縁に角度の深いプランティングを施し、鋭利な一側縁を素材のまま生かし刃部とする。先端部は素材時の打瘤部にあたる。素材の形状からみて、プランティングに先行して、素材の折断が行われたと考える。基部調整は顕著でない。

土師器・皿 (Fig. 13-1) 口径8.4cm、底盤径6.4cm、器高1.3cm。糸切り・板目焼の残る厚手の底部から体部は直線的に立ち上り、口縁部へ続く。胎土・焼成とともに良好。

瓦器・椀 (Fig. 13-14) 2・3は底部、13は口縁部破片である。いずれも器表面は銀灰色を呈し、内面にはヘラミガキが施されている。2・3の外底にはヘラ切り痕が残る。13は復元口径15.2cmを測る。体部はやや内弯気味に外広し、口縁端部は丸くおさまる。

瓦質土器・鉢 (Fig. 14) 12は擂鉢と思われる。胎土はきめ細かく、焼成は堅くしまる。復元口径は24.0cmを測る。口縁部は外面端部で肥厚し段を有す。器内面は刷毛目調整後、目が八条の櫛状施文具で底部から口縁にかけ搔き上げている。

白磁・椀 (Fig. 13-14, P L. 7) いずれも破片であり全体の形状を知りうるものは無い。体部の形態的な特徴から、3類に分類できる。体部はわずかに内弯気味に外広して立ち上がり、口縁端を折り返して玉縁をなすもの (A類)、口径に比して器高が低く、体部は内弯しつつ立ち上り、内弯する体部中位から外広し口縁端部を引き出すもの (B類)、直線的に外広する体部から口縁端部をそのままおさめるもの (C類) などであり、A類が多数を占めている。A類は4~6、14~16

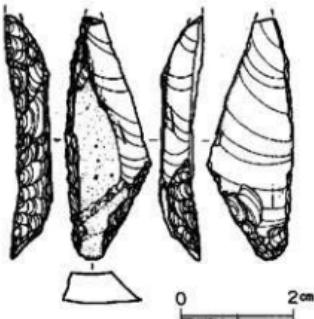


Fig. 12 諸岡1区出土ナイフ形石器実測図 (×1)

21~22で、いずれも玉縁は大きく、外面はヘラ削りし、内面見込みに沈線を1条めぐらす。胎土はおおむね灰白色を呈し細かい黒斑が見られ、釉は体部外面下半まで施される。焼成が良好でキメ細かく青味の濃いもの(14)、淡い青味を帯びた乳灰色を呈するもの(4, 6, 16, 21, 22)、灰白色を呈し粗い質入があるもの(5)、焼成が悪く黄灰色を呈するもの(15)など焼成および釉調に相違が認められる。復元口径は最小14.8cm(14)、最大17.2cm(6)の間におさまる。B類は8, 19で高台を細く高く削り出し体部外面はヘラ削りする。釉は外面高台部付近まで施され、内面に沈線1条と共に横目文を配す。胎土は灰白色、釉色は淡い乳灰白色を呈す。C類は20のみで胎土は灰白色を呈し精良、青味を帯びた乳白色の釉である。底部の破片には二種類あり、7と17は幅広の高台で削り出しが浅いもので、玉縁口縁となるものである。18は高台を細く高く削り出し内底見込みに段をつくり、釉を輪状にカキ取っている。口縁部を外反させる形態の碗であろう。

青磁・椀 (Fig. 13・14, PL. 7) 9は口縁部片で復元口径16.2cm、口縁端部を丸くおさめ内面に沈線をめぐらす。釉は薄く、内面に草花文を配している。10~11は底部片で、器肉の厚い底部から断面四角形の高台を削り出している。胎土は灰色を呈し精良で、釉色は草緑色を呈し高台部疊付およびその内側は露胎となる。10は内面を2条の沈線で五つに画して飛雲文を配し、内底見込みにはキノコ状の文様を3個片彫りするもので、11は内面と見込みに草花文を片彫りする。23は口縁部片で復元口径14.3cm、口縁端部を外反させ丸くおさめ、釉は厚く青緑色を呈す。これらはいずれも龍泉窯系青磁である。

滑石製合子 (Fig. 14-24) 底部径5.6cm。底部は平坦にノミ削りによって仕上げられる。体部外面はノミ削り痕を残しており、直線的に底部から外広しつ立ち上った後、若干内傾気味に口縁へと続く。内面はノミ成形後滑らかな面に仕上げられている。

砥石 (Fig. 14, PL. 7) 砂岩製。現存長16.7cm、巾10.1cm、厚さ8.5cmを測る。表裏および左右両側面に滑らかな砥ぎ面が残る。下半部が欠損している。

4 小結

造構の切り合いからみた先後関係は先述したように、SD02→SX02→SD01→柱穴状小窓穴群の一部、SD02→SX03となり、少なくとも三時期にわたる造構の造営時期が想定できる。表土・各遺物は、ナイフ形石器を除いて概ね11世紀後半~14世紀後半におさまるが、これらから各造構の時期について検討すると次のようになる。SX02の崩壊埋土中から出土した白磁碗19は太宰府周辺においては、その初現を14世紀中頃にみるとされている。したがってSX02を切るSD01は、少なくとも14世紀後半以降のものと考えられる。SX02は、19の堆積以前は当然として、諸岡C・D区、板付F-7a調査区の諸例から12世紀後半~13世紀に求められ、SX01・03もほぼ同時期と考えられよう。SD02については明確でないが、SX02・03より若干古い時期11世紀末~12世紀前半とみて大過ないと思われる。

諸岡 I 区

13

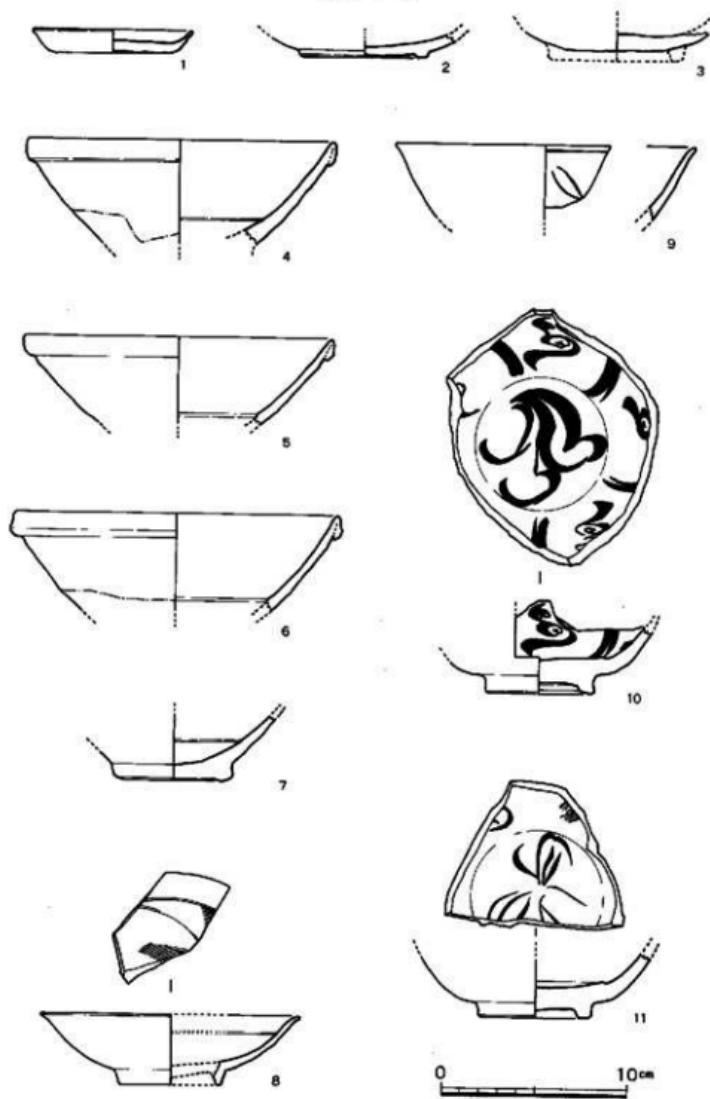


Fig. 13 諸岡 I 区表土層出土遺物実測図 (13)

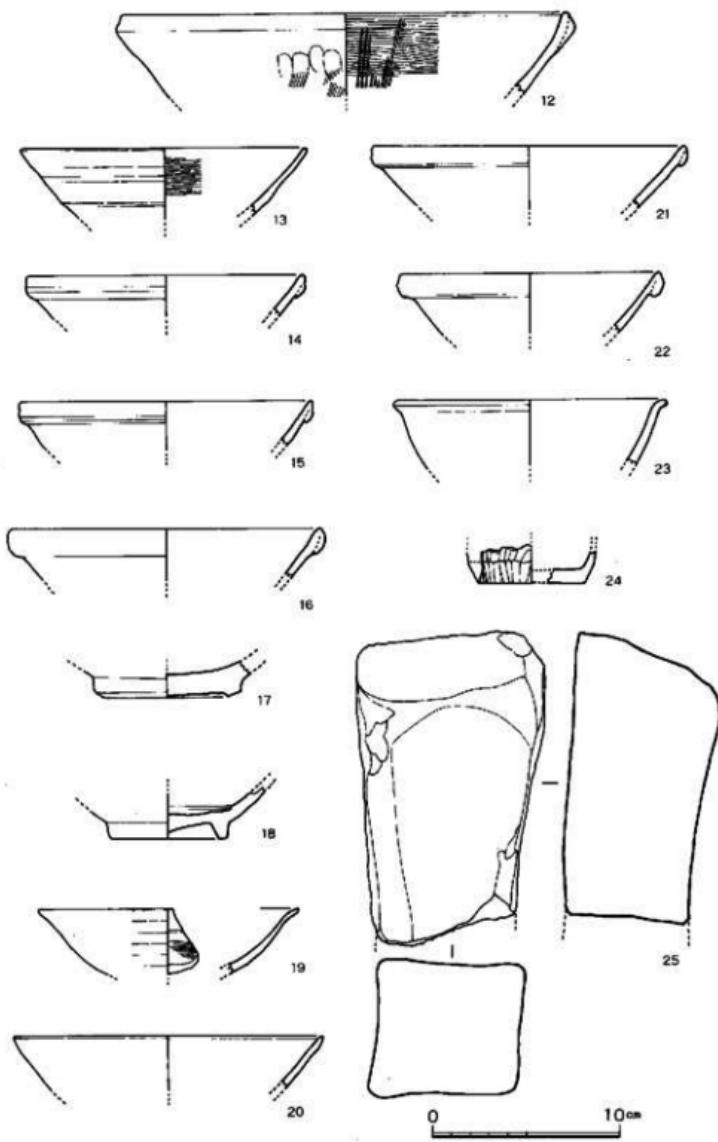


Fig. 14 諸岡 I 区各遺構出土遺物実測図 (分)

IV 諸岡J区の調査

1 調査概要

諸岡J区は諸岡丘陵東側斜面の端部に位置し、I区から北東へ約70m隔てた地点にある。古くから宅地化されているため、すでに自然地形は失なわれ、地山も大幅な削平を受けている。旧地形では調査区東側に隣接する里道が南北に走っており、その東側は段落ちして水田が営まれていた。現況は水田が埋め立てられ、市道が走り高層アパートが建てられている。北側は里道を挟んで民家があり、西側、南側も民家が隣接する。今回の調査は住宅の建替えに伴うもので、発掘区は建築部分のみに限定し、東西15m、南北8m、植木のために北東隅を斜めにした略長方形をなす面積約172m²を調査した。調査区全体は整地のために地山面まで削平を受け、暗褐色粘質土の遺物包含層は黄褐色粘質土の地山の西部に部分的に残るのみで、30cmの厚さで客土層が直接地山を覆っている。地山面の標高は9.40m前後では平坦であるが、北側と東側にわずかに傾斜している。

検出した遺構は、溝4条、井戸5基、土塙2基、柱穴状小竪穴83個である。溝は調査区東半部にSD01が南北に走り、その東側にSD02が並行しながら途中で消滅する。調査区北端部には西から東へ走るSD03を検出したが、西壁と庇の一部を明らかにしたのみで、北側は調査区を外れるので、全体の規模は不明である。また、調査区東端部に東側に急傾斜する段落ちが認

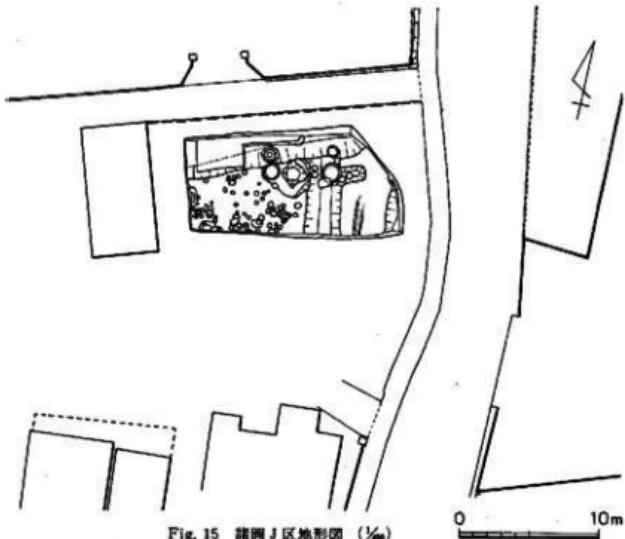


Fig. 15 諸岡J区地形図 (1/500)

16

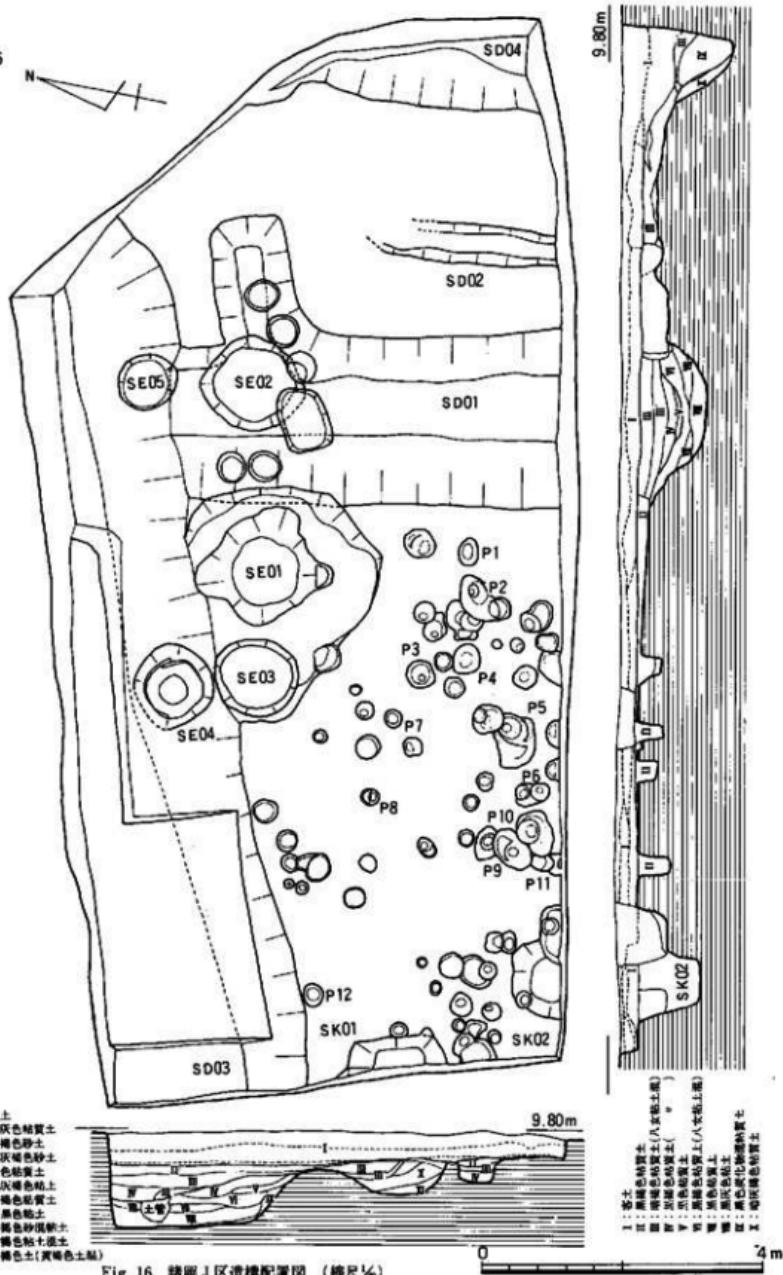


Fig. 16 茱岡 J 区造構配置図 (縮尺1/500)

められ、その東側も調査区を外れるため全体は不明であるが、一応溝として考えSD04とした。井戸は調査区中央北寄りに5基が集中するが、切り合うものは無い。SE01とSE03は地山面から検出され、SE02はSD01の埋土から、SE04とSE05はSD03の埋土除去過程で検出された。土塙はSK01が調査区西壁に接して、SK02が南壁に接して検出された。柱穴状小堅穴は調査区西南寄りに集中し、掘り方、切り合い、埋土の相違から、中世から近代にわたるものが重複すると考えられるが、調査区の限界から建物を確實になしえない。遺物は、土師器、瓦器、瓦質土器、瓦、宋・元代の磁器などの外、明、李朝の陶磁器、伊万里、唐津、高取など近世の陶磁器、下駄、滑石製石鍋などが出土した。

2 検出遺構

溝

SD01 (Fig. 14, P.L. 10) 長軸をN-11°-Wにとり南から北へ直線的にのびる溝で、幅広の逆台形の断面をなす。南端部での上幅2.60m、底幅0.93m、深さ0.80mを測る。北側5.40mの位置でSD03によって切られ、北西壁はSE01によって切られている。東北壁には平面長方形の張り出し部分があり、長さ1.80m、幅1.10m、深さ0.50mを測る。溝の埋土はレンズ状に堆積し5層に分けられる。埋土中の遺物は土師器皿、壺、椀、瓦器椀、土師質の鍋、釜、施釉陶器、白磁椀、青磁椀、瓦、砾石などが出土している。埋土最下層の黒灰色粘質土の遺物は

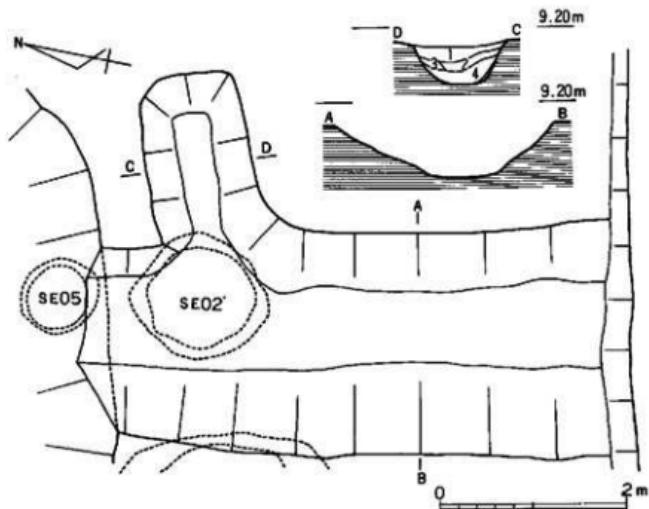


Fig. 17 諏岡J区溝(SD01)実測図(%)

糸切り離しの土師器皿、布目丸瓦片が出土し、SD03の時期比定の参考となろう。

SD02・SD01の東側約1.0mの位置に並行する小溝で、調査区中央付近で消滅する。幅は0.40m、深さは0.20m前後である。埋土は暗灰褐色粘質土單一層で、白磁、青磁が出土した。

SD03 主軸をN-67°-Eにとり西南西から東北東へのびる溝である。調査区を外れるため北側壁の掘りかたは明らかでない。南側壁掘り方の傾斜は約45°で、底はゆるやかな傾斜を見せて続き、北端部での深さは0.82mを測る。調査区西端部では掘りかた下場から1.90mの位置まで底が続いている、断面形は逆台形をなす幅広の大溝であると考えられる。埋土からは土師器、瓦器、瓦質土器、白磁、青磁などの外、近世の陶磁器が多量に出土した。このSD03が埋まつた後、SE04とSE05が掘られている。

SD04 調査東端に南北へ続くもので、西側壁と底の一部しか確認できない。掘り方の傾斜は約50°で深さ0.95m、底は平坦である。SD03とは直交する位置関係をなすが、未掘のため不明である。埋土中の遺物には、土師器、土師質土器、近世陶磁器、石斧などがある。

井戸

SE01 (Fig. 18, PL. 11) 上端径1.65m、深さ1.87+αm、底付近径0.94mの素掘りの井戸である。掘り方上端から1.45m下方までは井戸壁はやや外広するがそれ以下は垂直に掘削が行われている。涌水点は遺構検出面から約1.80m（標高7.20m）の位置で、涌水量は多い。井戸内の埋土は黒灰色粘質土であり、堆積状況からみて埋め立てられたものと考える。遺物は土師器小片、陶器擂鉢が出土している。いずれも埋土上部からの出土である。

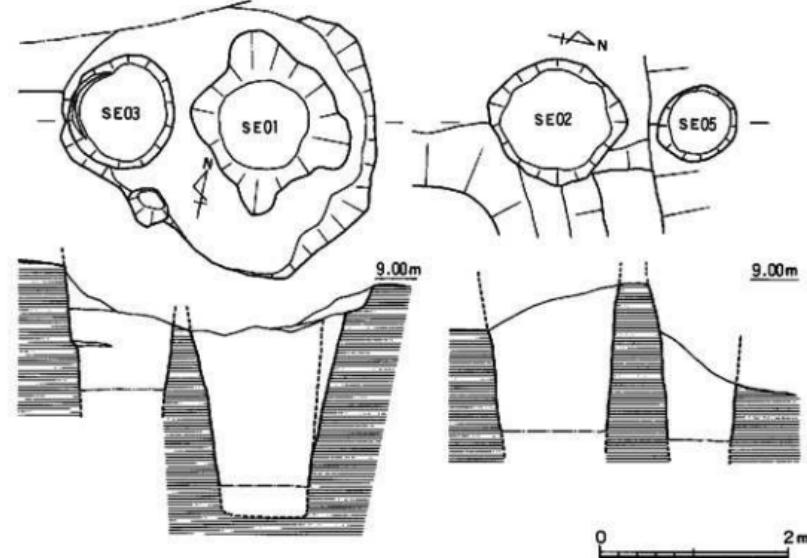


Fig. 18 諸岡J区井戸 (SE-01・02・03・05) 実測図 (%)

SE02 (Fig. 18, PL. 12) 上端径1.34m、深さ $1.56+\alpha$ m、底付近径1.3mの素掘りの井戸である。井戸壁はほぼ垂直に掘削されている。湧水点はSE01と同様ほぼ同じ高さで、湧水量も多い。埋土は自然堆積とは認められない。黒灰色粘質土の單一層でありSE01同様埋め立てられたと考える。埋土上部より白磁が出土。

SE03 (Fig. 18, PL. 12) 上端径1.15m、深さ $1.35+\alpha$ m、底付近径0.895mの素掘りの井戸で、井戸壁はやや外広し、西側に一段の作りつけがみられる。埋土の堆積状況はSE01と同様である。湧水点の位置は、未確認であるが他の例とほぼ同じ標高をとると思われる。埋土上部から土師器小片が出土。

SE04 (Fig. 19, PL. 13) 堀り方は径1.16mの円形をなし基底部に割り貫きの木枠を据え置いた井戸である。現存高59.1cm、長径77.8cm、短径67.2cm。基底面は八女粘土層下部あたり、細砂質粘土となっている。組み合せは2.5~3cm厚の割り貫き板材の両端下部に径5.2cmの柄穴を穿ち、そこに楔状の用材を打ちこんで二枚の板材を桶状に固定している。おそらく木枠上部にもこられと同様な作方が行なわれていると思われるが腐蝕しており明らかでない。北側の板材内面には柄穴状の未貫通の穴がみられるがその用途は不明である。木枠と掘方との隙間には青灰色粘土をつめこみ木枠の安定を図っている。瓦器柄片3、白磁柄片1、瓦片1、染付片1が堀り方埋土（暗灰褐色粘土）より出土している。なおSE04はSD03の埋没後掘削されている。

SE05 (Fig. 18, PL. 10) 上端径0.83m、深さ $1.68+\alpha$ m、底付近径0.66mの素掘りの井戸である。井戸壁は底にややすばまりつつ掘削されている。湧水点はSE02とほぼ同じ標高7.20mを測る。SD03の埋没後掘削されている。堀り方埋土は黒褐色粘質土の単一層で、自然堆積とは認められない。遺物は出土していない。

土塙

SK01 (Fig. 20, PL. 14) 調査区西壁にかかり検出された。平面形は長軸1.60m、短軸 $0.50+\alpha$ mの長方形をなす。深さは0.46mを測る。堀り方内には7枚の土層堆積がみられる。VI層から青磁碗高台片、III・IV層から瓦器、白磁、染付等の小片が出土している。

SK02 (Fig. 20, PL. 14) 南壁にかかり検出。平面形は直径約1.20mの不整円形をなす。堀り方内埋土は黒褐色粘質土の単一層で、土師器、瓦器、白磁、染付等の小片が出土している。

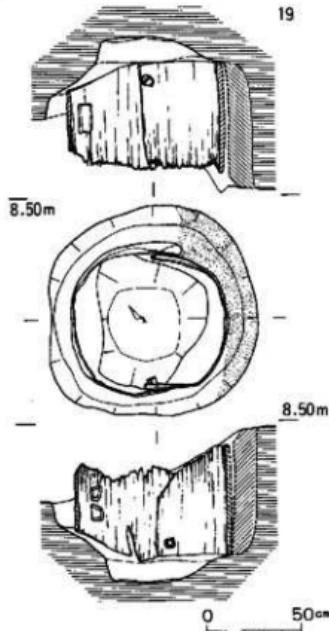


Fig. 19 諸岡 J 区井戸 (SE04) 実測図 (3)

3 遺物

記述にあたっては本調査区出土遺物をすべて一括して分類を行った。限られた紙面の都合によるものであるが、遺構毎に記述する繁雑さを避けたためである。なお遺構毎の出土遺物の内容と対照は章末の一覧表（Tab.1）の備考欄と実測図（Fig. 21~24）下欄を参照されたい。

土師器 (Fig. 21-1~10, P.L. 15) 1~4は皿である。口径8.6~9.8cm、器高1.0~1.9cmにおさまる。いずれも底部に糸切り痕を残す。1・3・4は厚手の底部から直線的に体部を引き出し、口縁端は丸くおさめる。2は体部がやや内寄し口縁端は尖る。5~9は杯でa~cに分類できる。杯a(5・6)は口径10.8~13.9cm、器高2.4~2.3cmで口径に比して器高がやや高いものである。底部はやや厚手で内寄り氣味に体部を引き出し口縁端は尖る。杯b(9)は底部と体部との境に有するもので、口径10.7cm、器高2.3cmである。杯c(7・8)はやや上げ底の底部をもち直線的に体部を引き出すもので、胎土・焼成とともに精良である。以上の杯はすべて糸切りで、色調は概ね黄~灰褐色を呈す。10は壺の把手である。胎土は粗く焼成不良。

瓦器 (Fig. 21-11~20, P.L. 15) 11~17は檐高台部、18~20は檐口縁部。檐高台部は高台の形態からa・bの二類に分けられる。a類(11~15・17)はヘラ切りの底部に断面が三角形に近い高台を低く貼付するもので、焼成はややあまい。内外面とも暗灰色を呈しヘラミガキが施されるもの(11~15)と体部外面の高台付近にナテ調整が施されるもの(12~14)とがある。6類(16)は高台を高く貼付するもので、a類と比べ胎土・焼成と

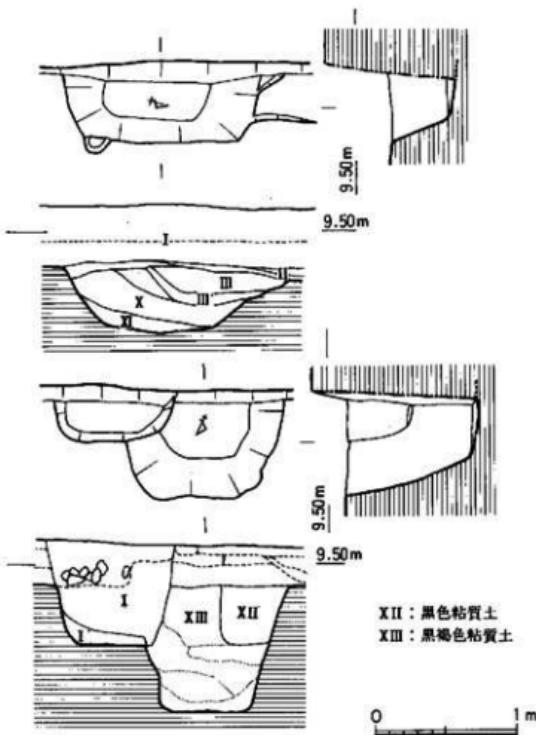


Fig. 20 諸岡J区土塙(SK01-02)実測図(%)

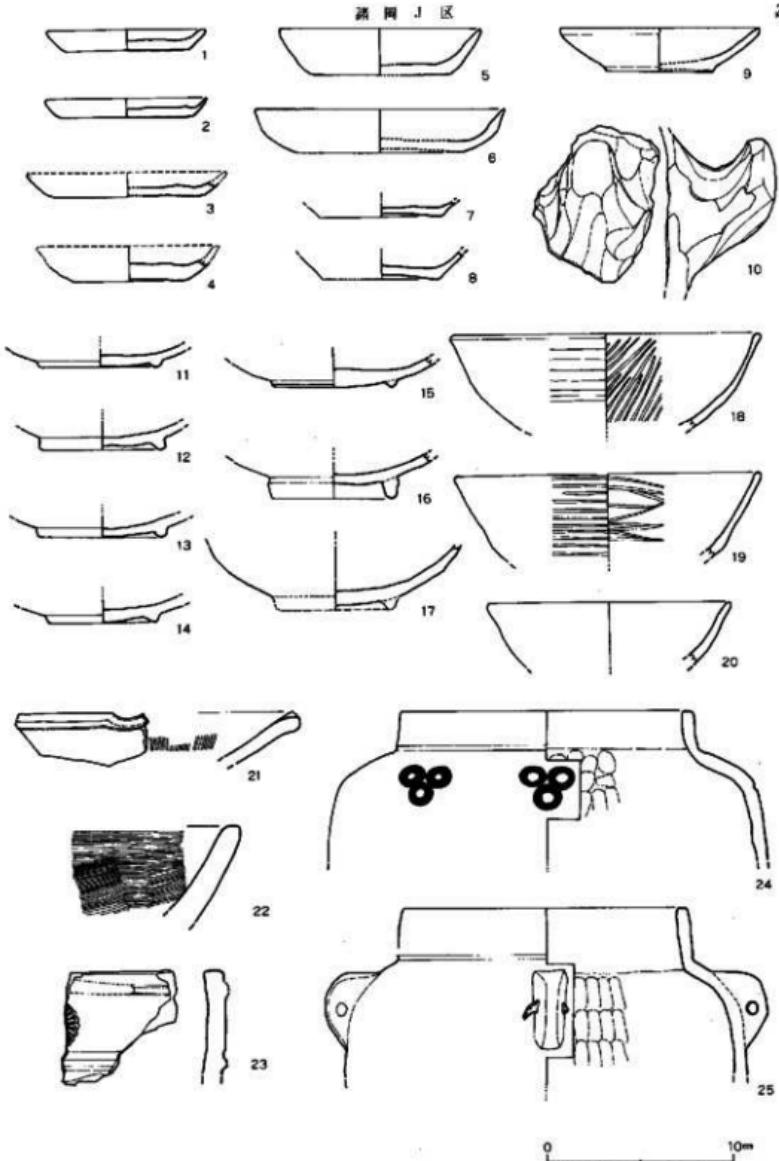


Fig. 21 諸岡 J 区出土十郎器・瓦器・土師質土器実測図(%)

(S D 01 : 4, 8, 9, 12, 18, 24, 25, S D 02 : 3, 20, S D 03 : 1, 2, 5, 10, 13, 15, 16)
 (21~23, S E 04 : 14, 17, 19, 表土 : 6, 7, 11)

も良好で、内面は銀灰色を呈す。体部外面・外底はナデ仕上げで暗灰色を呈す。17はa類に含まれるものと思われる。焼成は良く内面は銀灰色を呈す。口縁部(18~20)はいずれも体部外面に横位あるいは斜位のヘラミガキが施されるもので、内窓気味に立ち上がる体部中位に屈曲がみられる。胎土・焼成とも精良で器表面は黒灰色を呈し部分的に銀灰色となる。

土師質土器 (Fig. 21-21~25, Fig. 22-26~28) いずれも胎土は精良であるが焼成はあまり。21・26・27は片口である。21は内面に10条単位の櫛目が、27は底部から口縁へ釘線文がみられる。26はヨコ方向の目の細かなハケ目調整が施されている。22は土鍋口縁部である。内外面とも黒灰色を呈しハケ目調整が施されている。体部へ移る屈曲部位で欠損。23は火鉢である。型押しによる菊花文がみられる。24・25は土釜である。口縁は直立し、やや肩の張った体部となる。24は肩部に円を三つ組み合わせた幾可学文を施す。25と同様に肩部に一对の耳を有すと思われる。25の耳には腐蝕した鉄環が若干残る。28は土鍋である。内外面とも黒灰色を呈し、内面には指頭圧痕および横位のハケ目調整、外面には縦位のやや目の粗いハケ目が施される。体部の最大径を測る位置に断面台形の錫が貼付されている。

瓦質土器 (Fig. 22-29・30) いずれも火鉢である。29は地蔵をデフォルメ化した文様が、30には梅花文が型押しされている。内面はいずれも黒灰色で目の粗いハケ目調整が施される。

白磁 (Fig. 22-31~44, P.L. 15・16) 44の小楕を除きいずれも楕各部の破片である。楕口縁から体部では形態・手法などの特徴から3類に分けられる。A類は31で、やや内窓気味に外広する体部に小さな玉縁口縁をつくり、胎土は灰白色を呈し精良、焼成も良い。釉は美しい乳白色を呈す。B類は32で、口縁端を外反させ上面を平担に仕上げ、内面に1条の沈線をめぐらす。胎土は灰白色、釉は白色である。C類は33~35で、幅広の玉縁口縁をなす。内底見込みに1条の沈線をめぐらす。釉は乳青灰色を呈すもの(33・34)、黄灰白色のもの(35・36)との相違がある。楕底部は4類に分類できる。I類は37~38で、高台の削り出しが細く高く、内底見込みに沈線をめぐらす。施釉は高台外面まで、38には体部内面に描文を施す。II類は39で、I類に比べ高台幅が大きい。釉は淡い青灰色を呈す。III類は40~42で、幅広の高台を浅く削り出し、底部の器内が厚い。40を除いて内底見込みに沈線をめぐらす。IV類は43で、高台を断面三角に削り出し、青白色の施釉がなされる。疊付部は赤く発色し、高台内側外底部は露胎となる。これらの底部はI~II類がB類に、III類がC類に対応し、IV類は口禿青白磁であろう。45は小楕で、細く高台を削り出し、厚目の底部より内窓気味に外広する体部に、外反する口縁が統く。高台疊付部および内底見込みの釉を輪状にカキ取る。釉色は白色、口径10.4cm、器高2.8cm。

2. 青磁 (Fig. 22, 23-45~55, P.L. 16) 45~53は龍泉窯系青磁楕の各部破片である。いずれも胎土は暗灰色を呈し精良で、釉色は青緑色に発色する。高台の削り出しが断面四角形をなし底部の器内は厚い。45は体部外面に沈線による蓮弁を配するもので、46は内面に沈線と草花文様を片彫りする。47は2条の沈線によって体部内面を5割し、間に雷文を片彫りする。48は

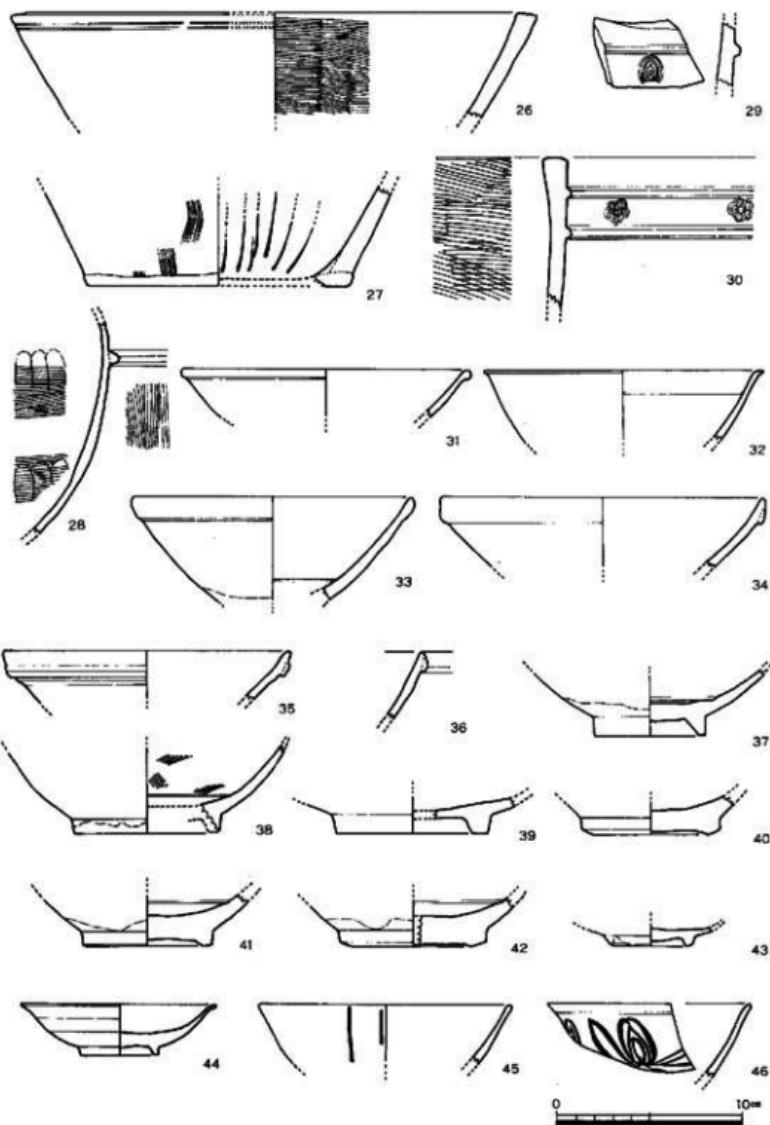


Fig. 22 諸岡 J 区出土土師質土器・瓦質土器・白磁・青磁実測図 (1/2)

(S D 01 : 26, 29, 30, 33, 36, 41, 42, 46, S D 02 : 32, 35,
 S D 03 : 27, 37~39, S E 02 : 28, 31, S P 03 : 44)
 表 土 : 34, 40, 43, 45

高台疊付部の釉をカキ取り、露胎部は赤く発色する。49の内底見込みには不鮮明な草花文様の片彫りが見られる。50～51は無文であるが、52は高台がやや高く、内底見込みには十字に組んだ独鉛文を刻している。53は高台部が小さく、外底高台内側の釉を輪状にカキ取っている。55は瓶子口縁部片で、口径5.2cmを測る。胎土は灰色を呈し精良、釉の発色は青緑色である。54は古伊万里系の青磁碗で、淡い青色を呈す。底部に化粧土を用い、厚く施釉する。露胎部は赤く発色し、体部内面は蕉葉らしき文様を刻す。

陶器・染付 (Fig. 23, 24-56～71, P.L. 17) 図示したもの以外にも、唐津、伊万里、高取系統の国産陶磁器が、SD03, SD04の埋土中より出土している。56は体部内面に綠釉を施した皿で、胎土は灰白色を呈し焼成も良い。57は内側に褐色の釉を施す燈明皿で、胎土は灰褐色を呈し焼成も良い。58～59は外面に黒色の釉を施す蓋で、外面四部中央に宝珠形のつまみを有す。いずれも内径6.0cmである。60は褐釉の瓶子底部片である。60は黄灰色の精良な胎土であり、釉は黄色に発色する碗である。細かい貫入があり透明である。61はやや粗い灰褐色の胎土で灰緑色の釉が全面に施される。62は胎土が黄灰色で粗く、化粧土の上から体部下半まで黄灰色の釉が施される。64は口径11.6cm、器高3.0cmの碗で、いわゆる李朝の粉引手茶碗に似るものである。65は削り出し高台疊付部3ヵ所に窓を切り、底部から屈曲して立ち上がる茶碗で、体部外面に化粧土を用い、不透明な白色の釉を施す。古高取に類例を見る。66は削り出し高台の鉢であり、体部内面に鉄絵を描き釉は黄色に発色する。いわゆる獻上唐津であろう。67～68は無釉の擂鉢で、67は糸切り離し、68は低い高台を削り出している。どちらも赤褐色を呈す。69～71は古伊万里系の染付磁器碗である。69, 70は体部外面に横線と柳文を配し、71は草花文を描いている。

石製品 (Fig. 24-72～74, P.L. 17) 72は滑石製石鍋の口縁部破片である。耳状突起が付され、突起中央には横位から削りこんだ四部がみられる。黒灰色を呈す。73は粘板岩製砥石ではほぼ半分が欠失。74は硬砂岩製柱状片刃石斧である。刃部は磨耗し丸くなる。基部は欠損。

瓦 (Fig. 24-75～77, P.L. 17) 75は平瓦片で胎土は精良、焼成も堅緻で暗灰色を呈す。凹面は繩目の叩き、凹面はヘラ調整する。76～77は丸瓦片で外面は繩目の叩きをすり消し、内面は桶巻作りの模骨痕を残す。側縁部を内側斜めにヘラ削りする。76は焼成不良で暗褐色、77は焼成良好で灰色を呈す。

木製品 (Fig. 24-78～80, P.L. 17) 78は長さ12.4cm、厚さ0.4cmを測る方形板材の破片で、一端を斜めに削る。欠損部は橢円形の窓が切られており、断面は斜めである。中央に小さな釘穴と何かを取り付けた痕跡が認められる。79は連齒の下駄で後部を焼失している。台部の長さ17.6cm、幅6.9cm、厚さ1.1cm、器高2.8cm、前歯幅2.1cm、後歯幅2.4cmを測る。80は組合せ円板中央部の板材で径22.7cm、厚さ0.7cmを測る。両側に2ヵ所の釘穴、中央部には直交する幅1.5cmの接合痕と裏打ちの釘穴が残る。縁部は斜めに削っている。鍋の蓋であろう。

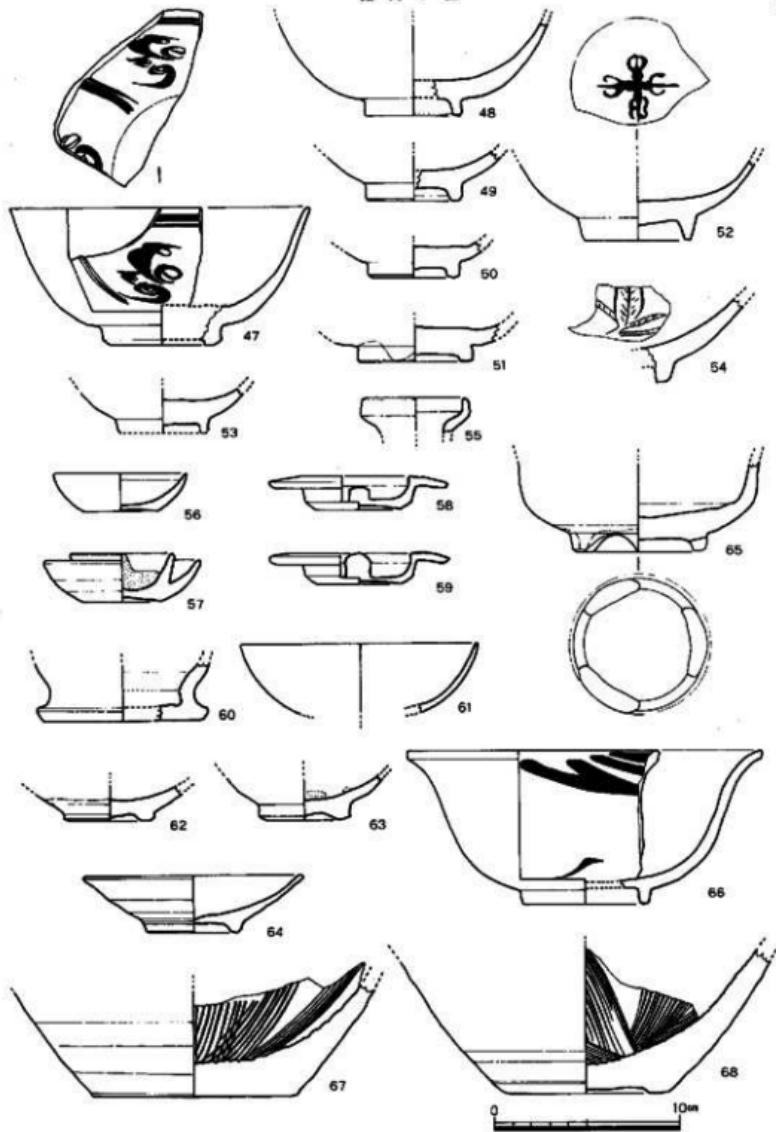


Fig. 23 諸 国 J 区出土青磁・陶器実測図 (%)

(S D 01 : 50, 51, 64, S D 02 : 49, 52, S D 03 : 47, 48, 54~61, 63, 66)
 (S D 04 : 65, 67, 68, S E 04 : 62, S K 01 : 53)

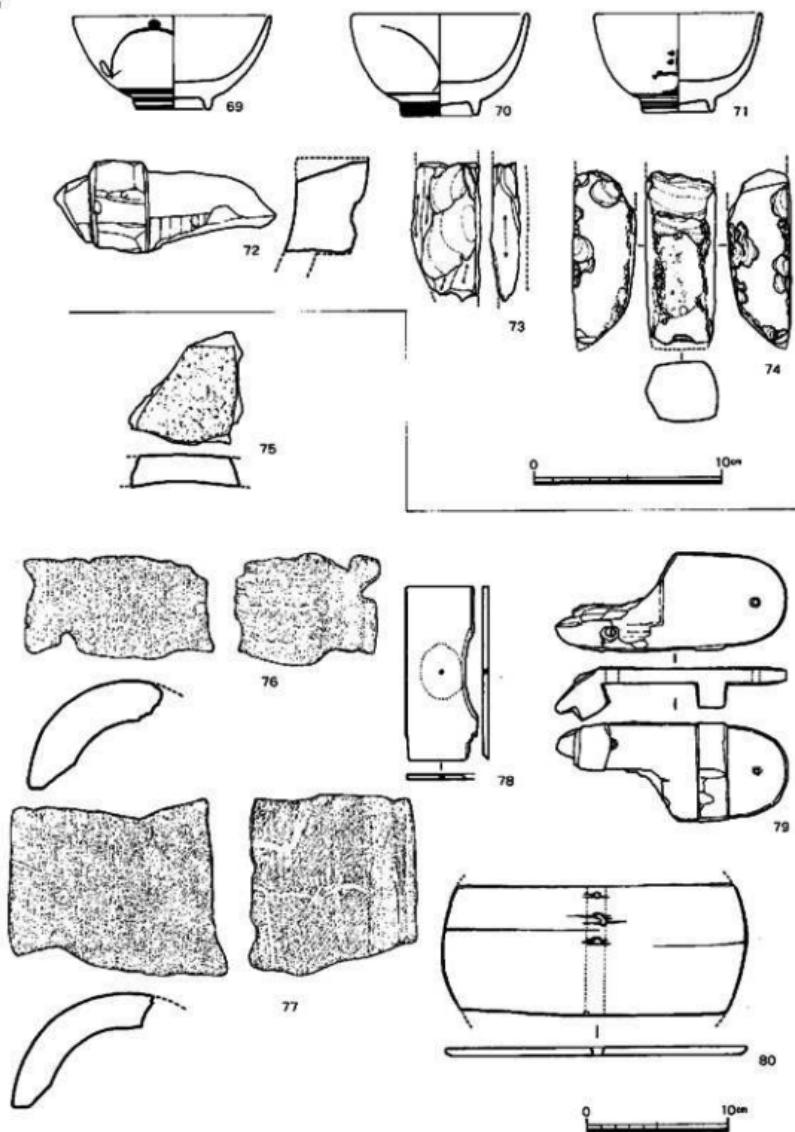


Fig. 24 諸周J区出土染付・石製品・瓦・木製品実測図 (1/2, 1/4)

(S D01: 73, 76, 77, S D03: 69, 70, 78~80, S D04: 74,)
(SE04: 71, 75, 瓦土: 72)

4 小結

これまで報告したように、検出した遺構は溝4条、井戸5基、土塙2基、柱穴状小竪穴群などであるが、調査区の狭少さや地山の大幅な削平などにより、各遺構の性格や相互関係について完全に明らかにする事ができない。溝についてはSD01とSD02が部分的に規模と構造を把握できるが、SD03とSD04では一方の壁が明らかでなく両溝の関係は不明である。井戸は発掘作業の安全のためSE04のみ完掘した。残る4基は形態的に類似しており、年代に大きな隔たりは無いと考えられる。土塙については壁際に検出され全体は不明である。柱穴状小竪穴群は調査区西半部から南側に集中するが、建物の構成を復原できなかった。切り合い関係を有する遺構は、SD01とSD03、SD01とSE01・SE02、SD03とSE04・SE05であり、これらの先後関係はSD01が最も古く掘削され、その後SD03が掘り込まれ、SD03がある程度埋められた後にSE04とSE05が前後して掘削されている。したがって本調査区においては、第Ⅰ期が溝SD01、第Ⅱ期が溝SD03、第Ⅲ期が井戸SE01～SE05の各期の遺構が営まれたと把握できる。柱穴状小竪穴の大部分は、第Ⅲ期以降のものであると考えられる。

各遺構から出土した遺物は下の表に記すとおりであり、中国製白磁・青磁、国産陶磁器、瓦、木製品などを含み、溝からの出土量が圧倒的に多く特に溝S-D03埋土からの出土が多い。これらの遺物の中で、白磁・青磁類、土師器など12世紀後半を上限とし中世末まで認められるが出土量は少ない。国産陶磁器の出土量が最も多く、初期伊万里、古唐津、古高取などがあり、17世紀から19世紀まで認められる。したがって、本調査区における各遺構の年代観は、第Ⅰ期が12世紀後半を上限とする時期、第Ⅱ期が中世後半、第Ⅲ期が近世前半～末葉と想定される。

Tab. 1 赤岡 J 区遺構別出土遺物一覽表

V 諸岡K区の調査

1 調査概要

本調査区は、昨年度実施したG区の北方20mに位置し、諸岡遺跡でも沖積地に接する丘陵据端部の地点である。G区では、11~16世紀にわたる遺構（掘立柱建物3、井戸2、溝3、土塙墓1）と、夜臼式期の整穴住居址1などが検出されている。したがって、G区に接する本地点も同様な遺構が予想されたが、調査区西半分は地下げ整地によって著しく削平されていた。

K区の土層層序は、全体に20cmほどの盛土下に畑地土壌（20~50cm）があり、その下の鳥栖ローム下層が遺構検出面である。包含層・新紀ローム層は削平されている。そのため、夜臼式期の遺構は全く検出できなかった（夜臼式土器は、中世井戸や土塙から出土している）。また中世の遺構も、井戸・溝など深い掘り込みをもつものが遺存するのみであった。この地下げによる整地は、室町時代の後半期におこなわれたと思われ、整地面にはそれ以後の掘立柱建物が重複して検出された。発掘区の東半分はゆるい下り傾斜となり、あまり削平は受けていないようである。東端部で段落ちの肩を検出した。

2 検出遺構

本調査区で検出した遺構は、樋4・掘立柱建物12・溝5・土塙2などである。その他、多数の柱掘方と思われるビットがあるが、平面規模としてまとめきれなかった。

遺構の年代は、12世紀を前後するものと16世紀~17世紀に分れる。前者は井戸1、溝1にすぎず、他はすべて後者に属するものである。

構列 (Fig. 26)

S A 01 調査区南よりで、東西にのびる3間分(6.3m)を確認した。短かく、建物の一部とも考えられるが、対応する柱列がないため構列とした。柱間は2.1mの等間、柱穴は径30~40cmの不整円形、30~40cmの深さである。溝S D 01と重複し、切り合いのある柱穴では溝に切られている。

S A 02 調査区東よりで2間分(3.6m)を検出した。建物S B 03と方位を同じくすることから、S B 03を構成する一部の可能性もある。そのばあい、北端の柱で西に折れ、3間分西にのびるかもしれない。Fig. 26では、その部分を破線でしめした。柱穴は径25~50cm、25~40cmの深さである。柱穴が溝S D 03を切っている。

S A 03 調査区東よりに検出された。南北2間(3m)で、建物の一部の可能性もある。柱穴は径30~40cmの不整円形、25~40cmの深さである。

S A 04 調査区中央東よりに検出された。南北にのびる4間分(約8m)確認でき、北側は

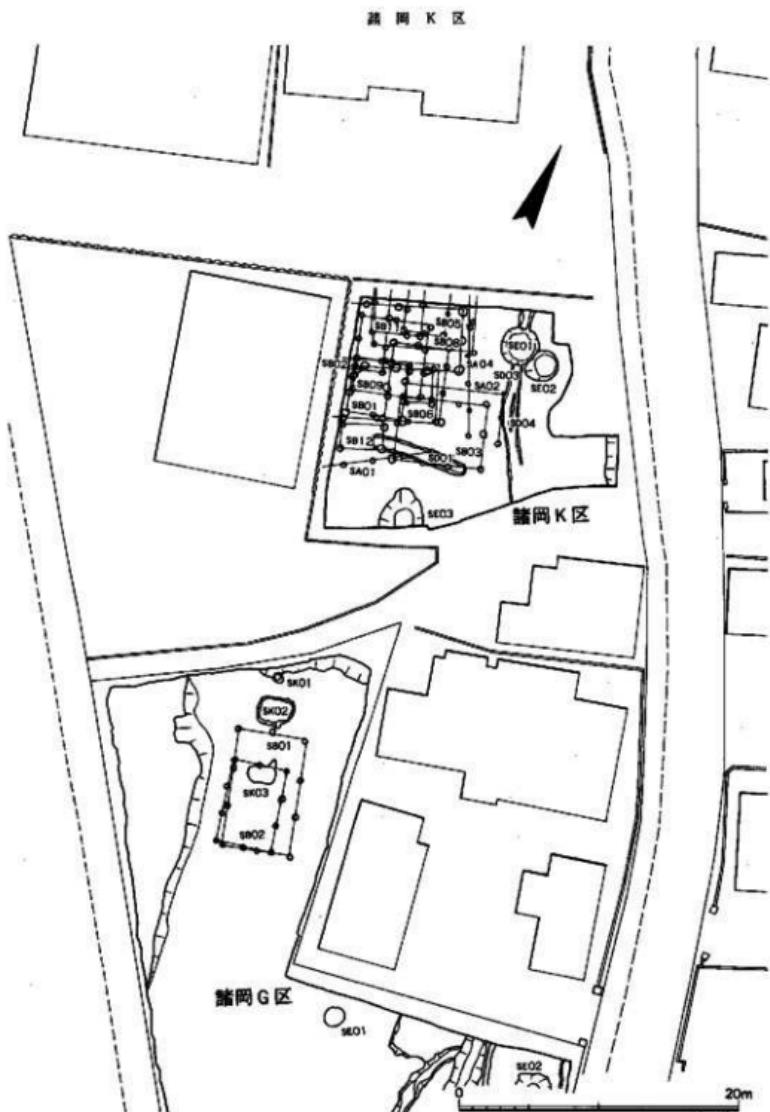


Fig. 25 諸岡 K 区位置図 (1/400)

未掘区に入る。柱間はほぼ2mの等間である。柱穴は径25~35cmの不整円形、深さ20~40cmである。

掘立柱建物 (Fig. 27・28, P L. 19)

調査区内では、かなりの密集度で計348個のピットが検出された。そのうち、規模や柱の圧痕の残っているものから、明らかに柱掘方と思われるピットは161個である。建物として平面的規模の全部あるいは一部を確認できたものは12棟、84個のピットの組み合せによる。したがって161のうちの84であるから、ほぼ半数強がまとまることになる。これら12棟の建物は16世紀を上限として、下限は17世紀中頃もしくは18世紀頃までの可能性がある。いわば中世末から近世初期の掘立柱建物であり、考古学な調査例が少なく、その平面規模や屋内の間仕切り等について不明な点が少くない。したがって柱穴のまとめ方に誤まりがあると思われるが、柱並びのよいもの、柱穴埋土から判断して確実と思われるものを報告する。内部の間仕切に伴なうと思われる床東柱は、SB03を除いてほとんど不明である。側柱の間に通る柱穴も少なくないが、あえて無理なまとめ方はしていない。

SB01 2×3間の方形の建物。桁行3.9m、梁行3.9m。柱間は桁行が1.3m(約4.3尺)、梁行1.95m(6.5尺)の等間である。柱穴掘方は径40~60cmの不整な円形、深さ40~60cmを測る。掘方底面に柱の圧痕を残すものが多い。SB08と重複する掘方では、すべて切られている。

SB02 2×3間以上の東西棟である。西端部に妻柱がみとめられないため、さらに西にのびるのであろう。桁行は3間分まで6.90m、梁行4.50mを測る。桁行の柱間は東より2.25m(7.5尺)・2.25m(同)・2.40m(8尺)とバラツキがある。梁行は2.25m(7.5尺)の等間である。柱穴掘方は径40~60cm、深さ50~60cmを測り、底面に柱圧痕を残すものが多い。

SB03 2×3間の東西棟。身舎の内側に床東と思われる柱穴がある。桁行6.30m(21尺)、梁行4.50m(15尺)を測る。桁行の柱間はやや不揃いだが、中央1.50m(5尺)、東西2.40m(8尺)と思われる。梁行は2.25m(7.5尺)の等間である。柱穴掘方は径25~50cm、深さ25~40cmである。溝SD02と重複するが、溝より新しい。

SB04 発掘区西北隅で検出された。大半が調査区外に入り、東西1間以上、南北2間以上の建物。柱穴掘方の規模、柱間が一致するのでまとめてみた。柱間は1.80m(6尺)で東西・南北とも等しい。柱穴掘方は径30cmほどの円形、深さ30~40cmである。土塙SK01との重複では、土塙が新しい。

SB05 発掘区北端部で検出された。東西2間、南北1間以上で大半は未掘区に入る。柱間は東西1.50m(5尺)の等間、南北も1.50m(5尺)である。柱穴掘方は径25~50cmの不整円形、深さ40~60cmを測る。掘方の重複するSB11との先後関係は確認できなかった。

SB06 発掘区北端で検出された東西棟建物。東西3間、南北1間以上で未掘区に入る。桁行7.20m(24尺)で、その柱間は2.4m(8尺)の等間である。梁行は2.25m(7.5尺)。柱穴掘方

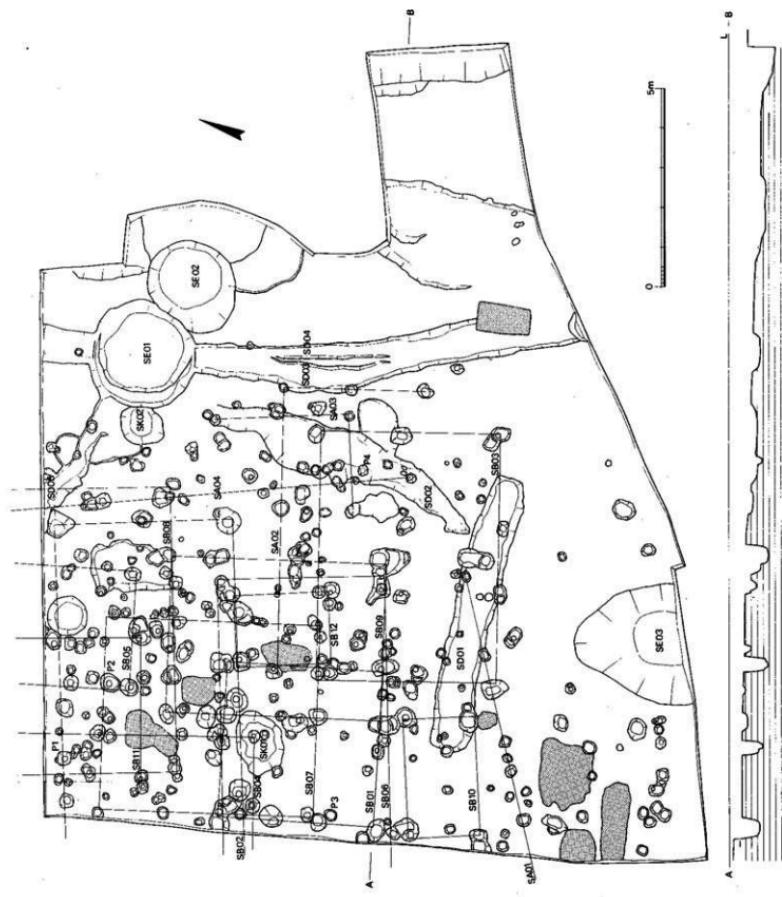


Fig. 26 遠景実測図 ($1/500$) L=GH. 10,064 m フットの部分は透視図。

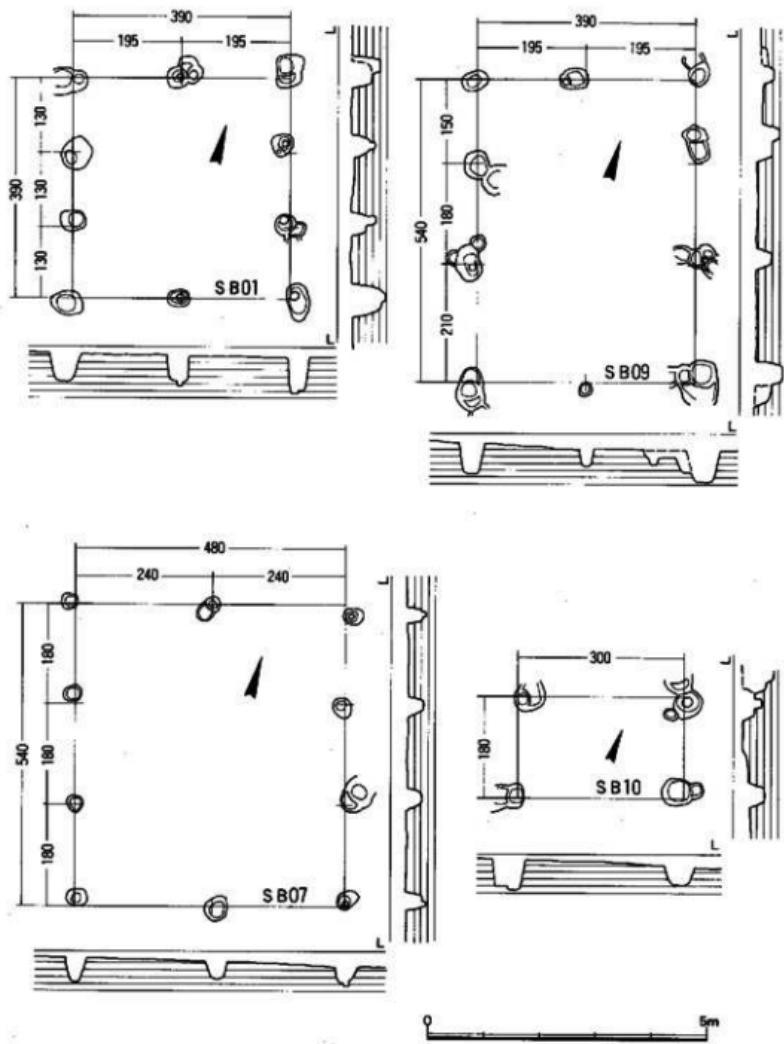


Fig. 27 柱立柱建物実測図 I (%) L=GH. 9.864m

は径25~40cm、深さ20~50cmを測り、底面に柱圧痕を残すものがある。

S B07 調査区西北隅で検出された。 2×3 間の南北棟である。桁行5.40m(18尺)、梁行4.80m(16尺)を測る。柱間は桁行が1.80m(6尺)の等間、梁行が2.40m(8尺)の等間である。

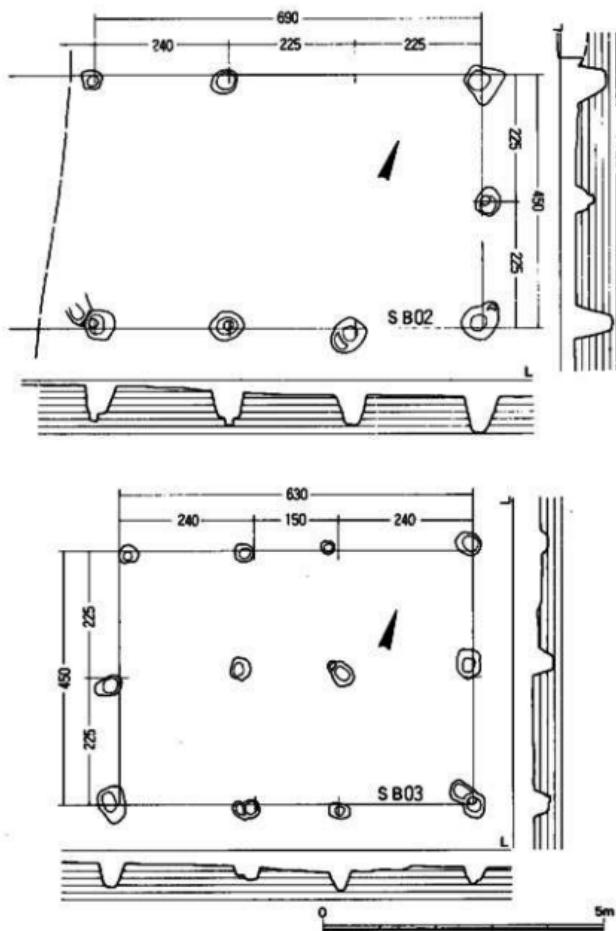


Fig. 28 据立柱建物実測図 II (%o) L=GH. 9.864 m

る。柱穴掘方は径30~45cm、深さ30~50cmで底面に柱圧痕のみられるものがある。

S B08 調査区中央西よりに検出された東西棟。西端に妻柱がないため、さらに西にのびる。桁行3間以上、梁行2間である。桁行の柱間は2.10m(7尺)の等間、梁行長3.90m(13尺)で、柱間は1.95m(6.5尺)の等間である。柱穴掘方は径30~50cm、深さ40~60cmを測る。柱根の残存が1ヵ所にあった。それは径16cmで、不揃いな多面体(6角形)に加工している。

S B09 調査区中央の西よりに検出された2×3間の南北棟建物。桁行5.40m(18尺)、梁行3.90m(13尺)を測る。桁行の柱間は南より2.10m(7尺)・1.80m(6尺)・1.50m(5尺)である。梁行は1.95m(6.5尺)の等間である。**S B02**と重複する掘方では、**S B02**より古い。

S B10 調査西端南よりに検出された。1×1間だが東西に長い。東西3m(10尺)、南北1.80m(6尺)である。柱穴掘方は径40~50cmの不整円形、深さ30~50cmを測る。

S B11 調査区北端の西よりに検出された。東西2間、南北1間以上で、北側の未掘部に入り完結していない。東西長3.60m(12尺)、柱間は2.10m(7尺)と1.50m(5尺)である。南北柱間は2.10m(7尺)。柱穴掘方は径25~45cm、深さ30~50cmを測り、底面に柱圧痕が残存している。

S B12 発掘区中央西よりに検出された。1×1間の建物で、東西長1.80m(6尺)、南北長2.40m(8尺)を測る。柱穴掘方は径40~50cm、深さ35~50cm、底面に柱圧痕がある。

Tab. 2 諸岡 K 区掘立柱建物計測表

規 模	方 向	桁 行		梁 行		方 位 (磁針)	床面積	
		実 長	柱間寸法(尺)	実 長	柱間寸法(尺)			
S B01	3×2	390(13)	4.3-4.3-4.3	390(13)	6.5-6.5	N16°30' E	11.7m ²	
S B02	3以上×2	EW	690+α	7.5-7.5-8	450(15)	7.5-7.5	N23° E	
S B03	3×2	EW	630(21)	8-5-8	450(15)	7.5-7.5	N19°30' E	28.35m ²
S B04	3以上×2	NS	360+α	6-6	180+α	6	N19°30' E	
S B05	1以上×2		150+α	5	300(10)	5-5	N17° E	
S B06	3×1以上	EW	720(24)	8-8-8	225+α	7.5	N22° E	
S B07	3×2	NS	540(18)	6-6-6	480(16)	8-8	N18° E	25.92m ²
S B08	3以上×2	EW	630+α	7-7-7	420(14)	7-7	N22° E	
S B09	3×2	NS	540(18)	7-6-5	390(13)	6.5-6.5	N18°30' E	21.06m ²
S B10	1×1	EW	300(10)	10	180(6)	6	N23° E	5.4m ²
S B11	1以上×2	NS	210+α	7	360(12)	7-5	N21° E	
S B12	1×1	NS	240(8)	8	180(6)	6	N23° E	4.32m ²

桁・梁行実長はcm、()内は1尺を30cmとして割った数値

井戸 (Fig. 29, P L, 20)

S E01 発掘区北東隅に検出された。上端径2.8m、底面径1.8mの不整な円形を呈する。深さは検出面より1.2mを測り、西側は2段の掘り込みとなっている。涌水線は、上端より-50cmほどの鳥栖ローム・八女粘土層間にある。井戸枠・桶とともに残存していない。埋土は黒色土で人為的な様子ではない。溝S D03、井戸S E02との重複では、溝より新しく、S E02より古い。

S E02 上端径2.2m、底面径1.5m、深さ1.8mを測る。埋土の下半部はヘドロ状を呈し、また井戸枠も残存しないことから素掘りのまま使用されたのかもしれない。

S E03 発掘区南西端に検出されたが、南側 $\frac{1}{2}$ は調査区外にある。上端径3.1m \times (2.5 + α) mの不整な円形を呈し、深さは1.9mを測る。下底部は1.3mほどの不整な方形で、南と西側に井戸枠横板が残存していた(北・東側はない)。その固定は隅柱を用いて、一辺に2~3本の丸太杭を打ち込んでいた。写真撮影後、調査区境の壁面が崩壊し、枠は原位置をとどめず、固定していた杭も移動してしまった。再度の発掘は危険であったため、井戸枠のみを取りあげ調

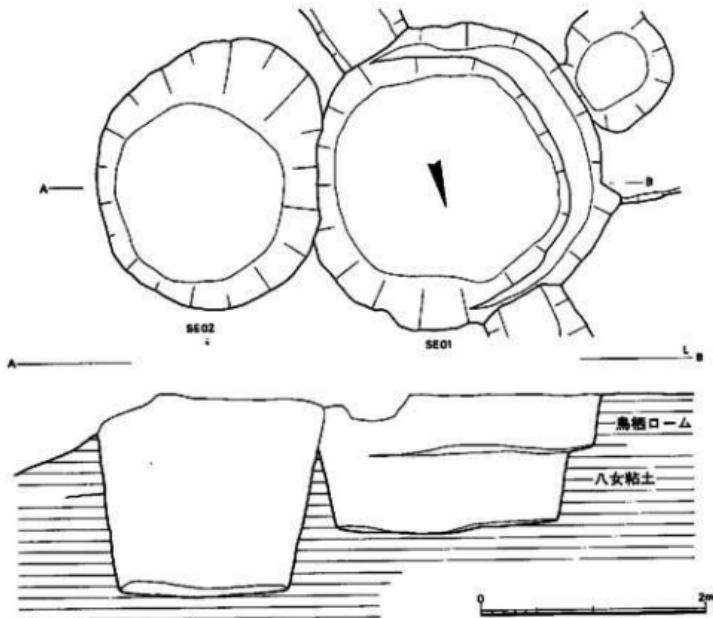


Fig. 29 井戸 S E01・02実測図 (%) L=GH. 9.50m

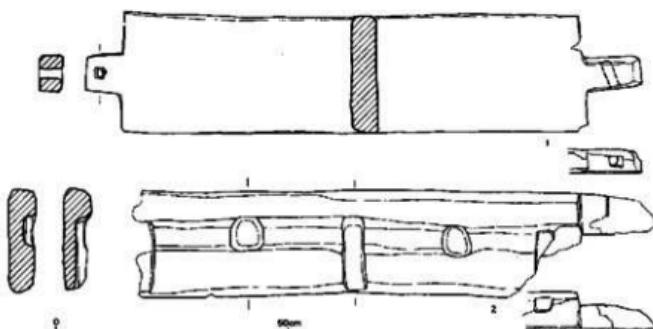


Fig. 30 SE03 井戸枠実測図 (36)

査を中止した。埋土は残存した井戸枠上にレンズ状をなして、八女粘土・鳥栖ロームのブロックが多量に混入している。

井戸枠 (Fig. 30, PL. 25) 1は全長120cm、高さ25cm、厚さ6cmの横板で、左右両端には凸部が切り出されている。左端の柄穴は水平、右端部では上下方向の柄穴がある。2は転用材の横板である。左右端部が折れ、現在の残存長114cm、高さ22cm、厚さ6cmあまりである。表面(井戸枠使用時は裏面)の3カ所に幅5cm、長さ16cm、深さ2cmほどの長方形の溝を一個面から切り込み、そのあいだに幅6~7cm、深さ2cmほどの不整円形の掘り込みを入れている。長方形の溝の上端から7cmあまりの幅で浅い掘り込みが横方向にはしっている。はたして建築部材なのか否か不明である。横板転用にあたって、凹部を切り込んでいる(右端にわずかに残存している)。1・2とも材質は未確定。

土塙 (Fig. 26)

SK01 上面は1.6×1.2mの不整形を呈する。深さ0.3mほどの浅皿状の断面形である。建物SB04より新しい。

SK02 上面は1辺1mほどの不整な隅丸方形をなし、深さ0.3mを測る。SE01よりも新しい。

溝 (Fig. 26, PL. 21)

SD01 発掘区の南よりに検出された長さ7m、幅1mあまりの土塙状の溝である。西側から徐々に下降している。深さは0.2~0.25mと浅く、皿状の断面形をなす。

SD02 SD01の東端部近くから、北にのびる不整な溝である。幅0.5~1.4m、深さ0.2~0.3m、長さは6mほどでSE01の南端で消滅している。

SD03 丘陵部の段落ちにほぼ平行して、南北にのびる溝である。発掘区外の南・北にさらにのびる。南半部ではSD04に切られて東側の壁は消滅している。幅0.4~0.8m、深さ0.2~

0.4mを測り、底面は北に向ってゆるく下降している。

S D04 S D03を切りながら北にのび、S E01の上で東に屈折し、S E02を切って発掘区外に続く。近世の溝。

S D05 発掘区の中央部北端から南東にのび、S E01付近で消滅する。長さは2mほど検出し、さらに発掘区外にのびる。幅0.4~0.7m、深さ0.3mを測る。

3 出土遺物

調査区の大半が削平されていたため、遺構面上に遺物包含層はなかった。出土した遺物は、井戸・土塙・溝、建物の柱穴掘方、ピットなどから土師器・輸入陶磁器・国産陶磁器・石製品などが出土している。総量は少なく、コンテナに6箱程度にすぎない。以下、遺構ごとに記述する。

井戸

S E01下層出土遺物 (Fig. 31, PL. 22・25) 土師器(皿・杯・椀・鍋)、白磁(碗)、石鍋、縄文土器などが出土した。

土師器

皿(1・2) 1の外底はヘラ切り、板目圧痕がある。2は外底器表が剥離し、不明である。1・2とも内底はナデ調整されている。口径9.2~9.3cm、器高1.3~1.5cm。他に5個体の破片がある。外底はすべてヘラ切りである。

杯(3) いわゆる丸底の杯。口径16.3cm、体部上位で屈折し、外上方に内弯ぎみにのびる。屈折部内面は強くナデて段状になる。他に1個体の破片がある。外底はすべてヘラ切り、板目圧痕を残すものもある。

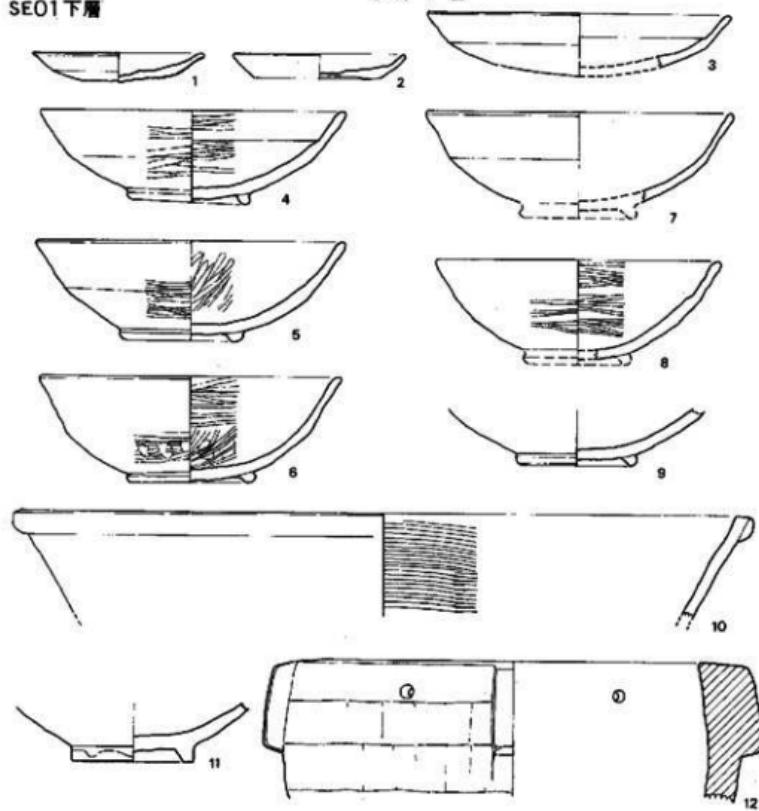
椀(4~9) 口径15.4~16.6cm。器高5.0~5.7cm。いずれも体部中位から上位で屈折し、内弯ぎみにのびるものと外反するものがある。4・8は丸底の杯に見られたように屈折部内面を強くナデて段状になる。器表は内・外面とも粗いヘラミガキを施すが、7・9では丁寧なナデ調整などの不分明なものもある。6は屈折部の内・外面に指頭押圧痕が残る。いずれも、高台は小さく鈍い。胎土・外表とも白みがかった灰褐色で、炭素の吸着はみられない。胎土中に1~2mmの石英・長石粒、雲母粒子を含む粗いもので、皿・丸杯の杯に等しく、精選されたとはいえない。しかし、1点ではあるが8は、暗褐色を呈し、胎土に茶褐色の粒子を含み異質である。

鍋(10) 体部下半を欠き、器形全容を知ることはできない。口径39.6cmの大形品である。口縁部外面に凸帯をめぐらす。内面は粗いハケメ、外面はナデ調整。暗茶褐色で外面にはススが付着している。

白磁

舞 阴 X 区

SEO1下層



SEO1上層

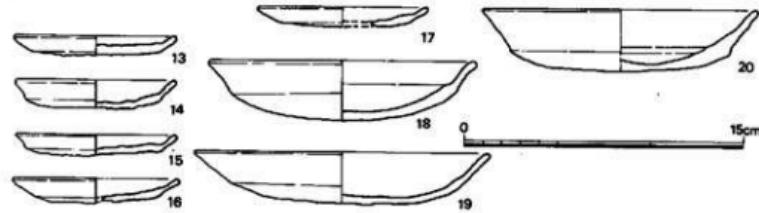


Fig. 31 遺物実測図 I (%)

碗 (11) 体部上半を欠く。淡い青灰色の胎土に灰白色の釉がうすくかけられている。細かい貫入が入る。高台は露胎である。高台外面は直に、内面は斜めに削り落されている。同一個体と思われる小さな玉縁の口縁部破片がある (II-1-a)。

滑石製品

石鍋 (12) 7個の破片が出土したが、個体数は判別しえない。12は縦長の把手を削りだしたもの。破片のため、把手数は不明だが4ヵ所につくと想定して図示した。把手のあいだに小孔を穿つ。これも數は不明である。内面はよく研摩されている。外面のノミ痕はかなり摩耗している。ススが付着している。

SE01上層出土遺物 (Fig. 31・32, PL. 22・23)

土師器（皿・杯・椀・鍋）、瓦器（椀）、白磁（皿・碗）、青磁（碗）、施釉・無釉陶器、滑石製品などが出土した。

土器

皿 (13~17) ヘラ切りのもの (13~17) と糸切りのものがある。糸切りのものは量的に少なく、かつ細片のため図示しえない。口径8.6~9.2cm、器高1.1~1.5cmで、下層の皿より口径が小さい。いずれも外底には板目圧痕があり、内底はナデ調整が加えられている。灰褐色系の色調を呈し、胎土は密だが1mmぐらいの石英・長石粒を含む。他にヘラ切りのもの20個体、糸切りのもの3個体分の破片がある。

九底の杯 (18・19) 口径14.6~16.0cm、器高2.7~3.3cm。18は体部の屈折部内面を強くヨコナデして段を付す。内面はナデ調整、体部外面は不調整である。ともに外底に板目圧痕がある。胎土は砂粒を含んだ粗いもので、淡い灰褐色を呈する。

杯 (20) 口径14.8cm、器高3.3cm・底・体部の境は低い位置にある。体部外面は不調整。胎土・色調は九底の杯と同じである。

椀A (21・22) 丸底の杯よりも体部が深く、かつ高台を付きないもの。口径14.6~15.6cm 器高は5cm前後である。底・体部の境で屈折し、体部は内弯ぎみに外上方にのびる。体部外面はロクロナデの凹凸が顕著で、21は不調整、22は凸部にヘラミガキを施す。外底は粗いナデ調整、21には板目圧痕がある。22の内面は粗いミガキ、21の内面はナデかミガキか不分明だが滑らかに器面を調整している。外面は暗褐色を呈し、内面には炭素の吸着がみられるが充分なものではない。胎土は緻密だが、2~3mmの砂粒のほか茶褐色の粒子を含む。

椀B (23~26) 体部中位で屈折し、体部は外反ぎみにのび、外底に高台のつくもの。ただし、底部まで残存したものはない。口径16.0~16.8cm。24は屈折部内面よりやや上部に強いヨコナデを加えて段をなしている。体部内面は丁寧なナデ調整のものと、その上に粗いヘラミガキを施すものがある。胎土は椀Aよりも砂粒の混入が多く、杯に近い。色調も灰褐色系がほとんどである。24は内面に淡く炭素の吸着がみられる。他に5個体以上の破片がある。

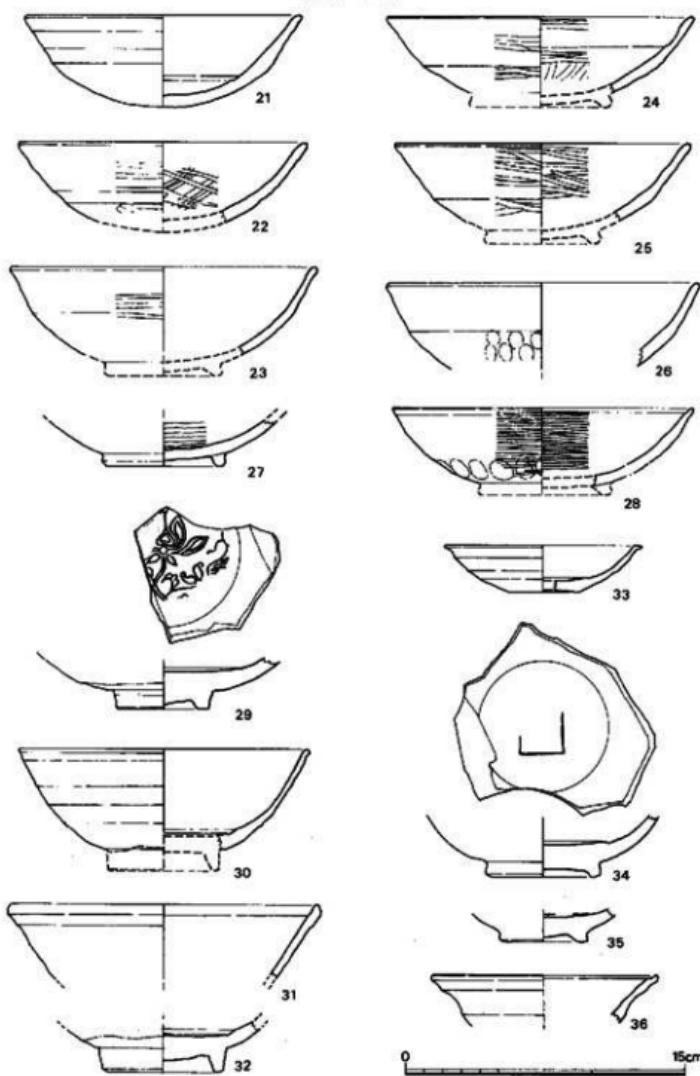


Fig. 32 遺物実測図 II (%)

鍋 (37) 復原口径37.4cmを測る。体部上位の内・外面はヨコナデ、中位以下はナデ調整。体部の上半内・外面にはスス・炭化物が付着している。胎土は大粒の砂粒を多量に含む。

瓦器

椀 (27・28) 28は底部を欠く。体部上位でゆるく屈折し、口端内面に小さな段を付す。体部下半外面に指頭圧痕がみられる。体部の内・外面は細かいヘラミガキを施し、内底部には松葉状の暗文がある。胎土は精緻ではほとんど砂粒を含まない。色調は黒灰～銀白色を呈する。27もほぼ同様な胎土・色調だが、ヘラミガキは28に比して粗雑である。内底のミガキは一方のミガキの後に、直交するミガキを施している。他に底部が一点出土した。

白磁 (29~33)

碗はIV類3点(1が1点、不明2点)、V類4点(1が1点、3・a類が1点、不明2点)、その他1点が出土した。皿はIV-1類が1点、その他1点が出土した。

碗 (29~32) 29は淡い灰色の胎土に、やや厚めに施釉されたもの。体部下半は露胎である。釉色は緑がかかった灰白色で貫入が入る。内底見込みに沈線をめぐらし、その内側に草花文のスタンプがある。高台内側の削りが浅く、底部の器肉が厚い(14~15世紀)。30は白褐色の粗い胎土に、うすく施釉されている。体部下半は露胎である。釉色はくすんだ灰白色で、細かい貫入がある。見込みに浅い沈線状の段がめぐる。器肉は薄く、口端を外方にわずかにひきだしている(V-3・a)。31は不整な玉縁状の口縁部をもつ。灰白色的胎土に、やや厚めに施釉されている。釉色は淡い緑がかかった乳白色である(IV-4)。32は灰白色的粗い胎土に厚めに施釉されている。体部下半は露胎である。見込みに太い沈線状の段がめぐる。高台内面に径4cmほどの焼台痕がある(V-1)。

皿 (33) 口径10.6cm、器高2.5cmを測る。あげ底ぎみの底部端から口縁部の下までヘラ削りされる。口縁端部は水平に外方にするとくのびる。見込みに沈線状の浅い段がめぐる。胎土は白みの強い灰白色で、黒色の小粒子を含む。釉は底部を除く全面に施釉されている。釉色はウグイス色ぎみの灰白色である。

青磁

龍泉窯系の2点が出土した。

碗 (34) 白味をおびた灰褐色の粗い胎土に、高台端部まで厚めに施釉されている。釉色はくすんだ緑褐色で細かい貫入が入る。高台疊付には5ヵ所の目跡がある。見込みには浅い段がめぐり、なかに方形のスタンプが押されているが、刻印が浅く文字はみえない(I-1)。もう1点は、14世紀代のものである。

施釉陶器

輸入陶器(中国・明、朝鮮・李朝)と国産のものがある。

碗 (35・36) 35は李朝期のものである。胎土は淡い赤褐色で、1~2mmの砂粒を含みやや

粗い。釉はくすんだ白褐色でうすめに全体に施釉されている。高台疊付けと内底見込みに、重ね焼きの目跡がある。36は灰色の胎土にうすく施釉したもの。釉は白みがかったウグイス色である。口縁部内面は小さな受け口状をなす。唐津系と思われるが断定しえない。

他に褐釉の壺体部片と宋三彩洗（盤）の可能性のある底部破片がある。洗（盤）の胎土は淡いネズミ色で、砂粒を含み粗い。内底にヘラによる文様の一部があるが小破片のため、どのような文様かわからぬ。釉はすべて剥げ落ちている（P.L. 23-a）。

無釉陶器

甕（38） 底部のみの小片。胎土は1~2mmの砂粒を含んだ粗いもので、淡い赤褐色を呈する。あげ底状の底部である。外面にはススが付着している。

滑石製品

（39） 石鍋片を再利用したミニチュアであろう。

S E 03出土遺物 (Fig. 33, P.L. 22)

土師器（杯）、輸入陶磁器（青磁・白磁・李朝陶器）などが出土した。

土師器

杯（40~42） すべて糸切りである。口径11.4~11.7cmを測る。器形のうえで、40と41・42の2種にわかれる。40は器高2.1cmで、体部が低く皿に近い形態である。41・42は2.5~2.9cmと少し高い。体部は内弯ぎみに外上方にのび、邊部は尖りぎみに終る。体部内・外面はロクロナデ、40のみ内底にナデ調整が施されている。41・42は灰褐色を呈し、胎土に石英・長石粒子を多量に含み粗い。4は精選された緻密な胎土で、赤色・灰色の粒子を含む。

青磁

龍泉窯系碗I類の小破片が1点出土している。

白磁

碗Ⅳ類の小破片が1点出土している。

施釉陶器

小碗（43） 口径10cm、器高3.6cmを測る。体部の内・外面はロクロナデ、底部は内面を浅く削りだして低い高台状にしている。暗灰色で砂粒を多く含んだ胎土に、全面にうすく施釉している。高台疊付の釉はカキ落している。釉はくすんだ緑灰色で、内・外面に斑点状の焼きむらがある。内底見込みと高台疊付に5~6カ所の重ね焼きの目跡がある。李朝陶器である。⁽¹³³⁾

他に產地不明の小破片1点がある。

S K 01出土土器 (Fig. 33)

土師器（杯・碗・鍋・鉢）、瓦質擂鉢、石鍋、白磁Ⅳ類などが出土したが、いずれも細片である。

土師器

（44） 無釉陶器としたほうがよいかもしれない。器肉のきわめてうすい土器である。器形

は椀のようなものであろうか。内面にはロクロ氷びきの痕が顯著である。胎土は緻密で灰褐色を呈する。外面にススが付着している。

S K02出土遺物

土師器皿、瓦質の擂鉢の細片が出土した。図示できるものはない。

S D01出土遺物 (Fig. 33, P L. 24・25)

土師器（杯・皿・椀・鉢）、土師質の擂鉢、瓦器（碗）、白磁（碗）、染付、石製品が出土したが、細片が多い。その他に黒曜石フレイクが2点出土した。

白磁

碗皿類の小片が1点、他は図示した2点が出土した。

小碗（45） 体部の低い皿状のもの。胎土は白みの強い灰白色で緻密である。釉は全面にやや厚めに施釉された後、高台疊付の部分をカキ落している。釉色は青みがかった白色である（明・16世紀）。

猪口（46） 伊万里系の製品と思われる。口径5.2cm。灰白色のやや粗い胎土に、くすんだ灰白色の釉をうすめに施釉している。底部の器肉が厚い。

染付

碗（46） 小破片のため、口径は確実なものでない。胎土は淡い灰褐色で、灰黒色の粒子を含む。釉はやや厚めに施釉され、淡い灰褐色、細かい貫入が入る。具須は黒色に近い緑色に発色している。文様は不明。国産か輸入品か判別しえない。

滑石製品

（48） 宝塔の相輪であろう。上部を欠く。現高31.6cmを測る。下端は差し込みの部分である。断面形は正円でなく、梢円形となっている。

S D02出土遺物

土師器（皿・杯・椀）、瓦質土器（鉢）、瓦器（碗）、白磁（碗）、施釉陶器（天日碗）、土師質の火鉢などが出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。その他に夜臼式土器甕部片、砥石の小片などもある。土師器の皿にはヘラ切り、糸切りともにある。

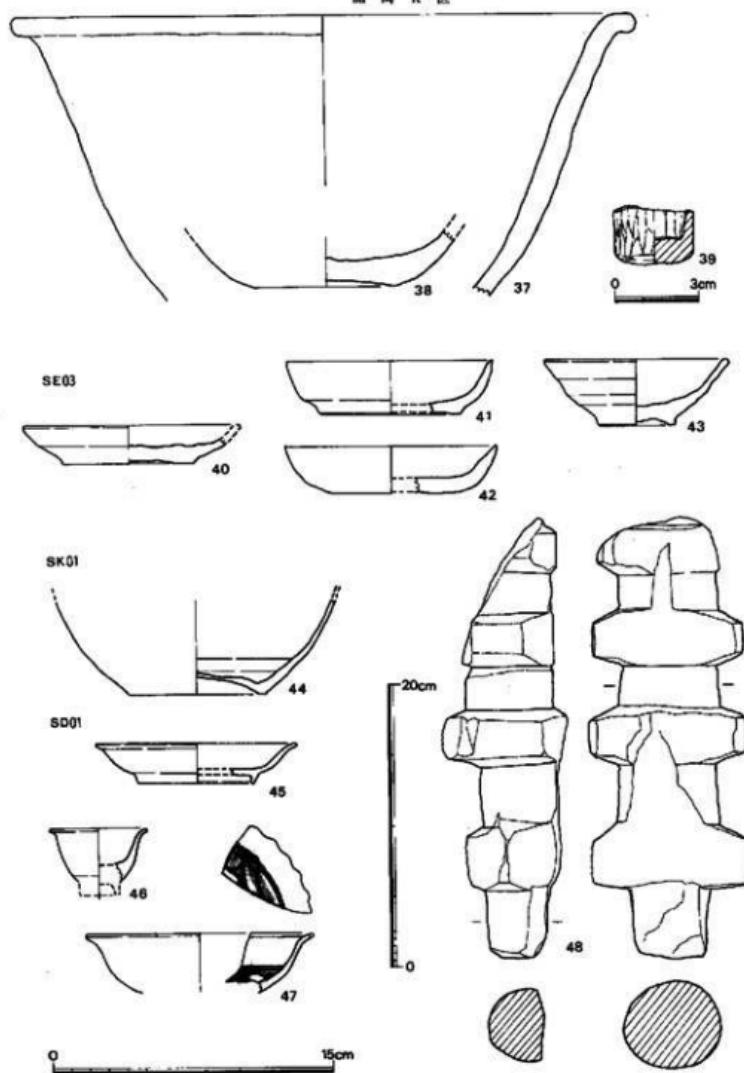
S D03出土遺物 (Fig. 34, P L. 23・24)

土師器（皿・杯・椀）、土師質土器、瓦質土器（擂鉢）、石鍋、白磁、施釉陶器などが出土したが、細片が多く図示できるものは少ない。その他、夜臼式土器甕の体部片、黒曜石フレイクが出土した。

土師器

杯（49・50） いわゆる丸底の杯である。口径14.7～15.0cm。底・体部の境で屈折し、体部は内弯ぎみにのびる。49の底部には指頭圧痕がある。灰褐色系の色調で、胎土も粗い。

瓦器

Fig. 33 遺物実測図III (39は $\frac{1}{2}$ 、48は $\frac{1}{4}$ 、他は $\frac{1}{8}$)

椀 (51) 口径17.0cm、器高5.0cmを測る。体部は中位で屈折し、外反ぎみにのびる。器表の輪郭が著しく調整は不明である。胎土は砂粒を多く含み緻密なものではない。淡い黒灰色を呈する。

瓦質土器

擂鉢 (52) 口径29cm、器高11.4cm。体部内・外面はナデ調整、口縁部内・外面はロクロナデを施す。体部下半外面に粗い指頭圧痕がある。内面には4本1単位の太い条溝が入る。破片のため片口部はわからない。胎土は砂粒を含んだ粗いもの、外面は暗灰褐色、内面は黒灰色である。

白磁

碗IV類の小破片が1点出土している。

施釉陶器

美濃系の灰釉陶器（碗）と、産地不明の黒釉碗がある。灰釉陶は小片のため図示できないが、暗灰色の胎土に厚めに施釉されたもの。釉は淡いウグイス色に発色し、粗い貫入が入る（P.L. 23-e）。

S D04出土遺物

土師器の杯か椀の体部小破片が1片出土しただけである。

S D05出土遺物

土師器の杯か椀の体部小破片、土師質の鍋・鉢、瓦質の擂鉢、石鍋、白磁碗（IV類）などが出土したが、すべて細片のため図示しえなかった。

掘立柱建物掘方出土遺物 (Fig. 34, P.L. 24)

S B01 いくつかの掘方から、土師器、土師質の擂鉢、瓦器碗、瓦質の鉢、白磁碗（IV類）、施釉陶器（李朝あるいは唐津系）、土師質の釜などが出土しているが、ほとんどが細片のため図示しうるものは少ない。

土師質土器

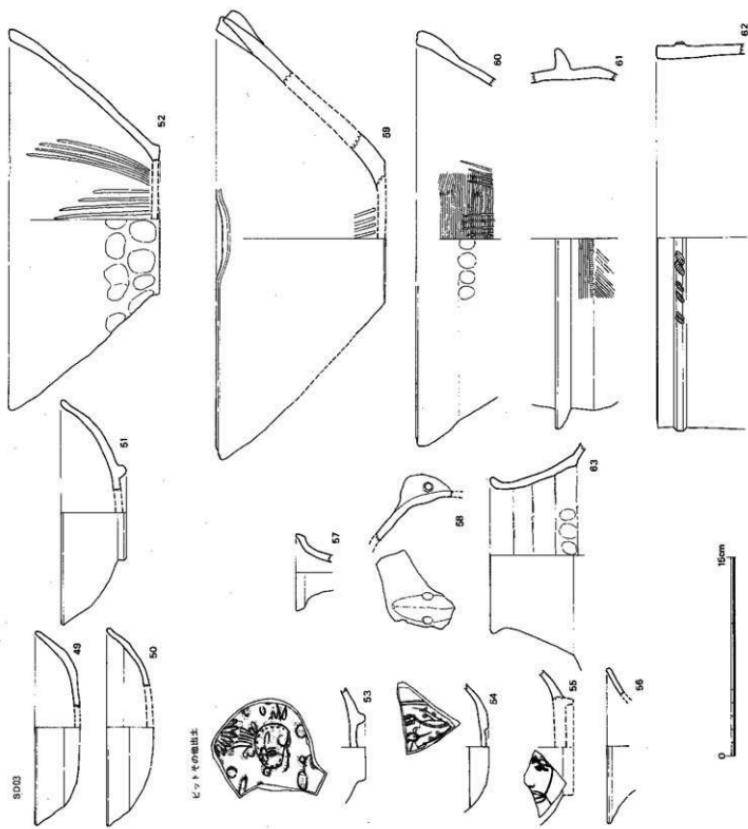
釜 (61) 体部中位の破片で、径は不確実である。胎土は砂粒が少なく精緻である。体部外面のツバより少し下ったところで屈折して底部にいたる。屈折部上方は粗い横のハケメ、下方は斜位のハケメ調整。体部内面はナデ調整である。ツバより下方は火を受けている。色調は外面暗褐色、内面茶褐色を呈する。

S B02 土師器、瓦器、白磁、染付、施釉陶器などが出土しているが、ほとんどが細片である。

染付

碗 (54) 茗筒底の碗で、体部上半を欠く。見込みの蕉葉文は丁寧に表現され便化がみられない。胎土は白色で釉はやや厚めである。呉須の発色もよく藍色である。明の染付で15世紀～16世紀前半に属する。

Fig. 34 產卵床測量 (cm)



SB03 土師器の小破片が出上しているが、図示しうるものはない。

SB05 土師器、白磁、染付のほか銀治津と思われる鉄津が出土している。染付（P.L. 24-a）は、碗の小片であるが、明灰褐色の胎土で、やや厚めの透明釉を施釉している。外面に唐草文の一部がみえる。明代の中頃南部の製品。

SB07 染付が出土している。染付は小破片で詳細はわからないが、内面に蕉葉文の一部がみえる（P.L. 24-c）。明の染付の可能性もある。

SB08 土師器、瓦質の鉢、龍泉窯系青磁、白磁、染付などが出土したが、いずれも細片である。その他、銀治津と思われる鉄津がある。染付は小破片で詳しくはわからないが明代の可能性がある（P.L. 24-b）。

SB09 瓦質の擂鉢、土師質の釜、白磁、染付、施釉陶器などが出土している。いずれも細片である。

土師質土器

釜 (58) 把手部の破片である。傾きについては正確なものでない。

白磁

壺 (57) 口縁部のみで、器形全体はわからない。水注であろうか。胎土は灰色ぎみの白色で、釉は厚めである。釉色は青みがかった白色。

染付 (53) 碗の底部破片。胎土は灰白色で精緻である。見込みには、中心に動物文様を置き、周囲に菊花、草文を配する。高台は太く安定している。具須は藍色に発色しており、透明釉はやや厚めに施釉されている。伊万里でも比較的初期の段階に属する。

SB10 土師器、土師質の鍋、瓦質の火鉢、龍泉窯系青磁、施釉陶器などが出土したがいずれも細片である。

瓦質土器

火鉢 (62) 口径20cm、口縁部下に低い凸帯がめぐる。凸带上には柾目の板端部を押圧している。口縁部内・外面はヨコナデ、凸帯以下は、内・外面ともナテ調整を加える。胎土は精緻で、砂粒をほとんど含まない。暗灰色を呈する。

SB12 土師器・施釉陶器の小破片が出土している。

施釉陶器

(56) 器形は碗であろうか。小破片のため口径は不確実である。胎土は明灰色で、砂粒の混入は少ない。釉はうすく施釉され、ウグイス色ぎみの灰白色である。細かい貫入が入る。

ピット出土土器 (Fig. 34, P.L. 24)

土師質土器

擂鉢 (59) 破片が小さいため口径は不確実である。胎土は3~4mmの石英・長石等を多量に含み粗い。内面に4本を単位とした条線が施される。明灰褐色。ピット1出土。

瓦質土器

擂鉢 (60) 破片が小さいため、口径は不確実である。口縁部の外面が肥厚した形態で、片口部分はわからない。口縁部内・外面はヨコナデ、以下外面はナデ調整を施す。内面は全体にハケメ調整され、その上に4本を単位とした条溝を刻んでいる。胎土は精緻で砂粒の混入は少ない。内面から口縁部外面に炭素の吸着がみられる。体部外面は明るい灰白色を呈する。ピット2の出土。

染付

碗 (55) 小破片のため、傾き・径は不確実である。淡い灰色の胎土でやや厚めに施釉している。体部外面下半部に唐草文がめぐる。鼻須は濃緑色に発色している。透明釉には粗い貫入が入る。明代中国南部（広東・安南周辺）の製品。**S B05柱穴掘方出土の染付と同産地である。**ピット3出土。

無釉陶器

擂鉢 (P.L. 24-f) 小破片である。口縁部の内に鈍い凸帯をめぐらす。2~3mmの砂粒を含む粗い胎土で、内・外面とも暗赤褐色である。13世紀頃の中国産か。ピット4からの出土。

夜白式土器

壺 (63) 口径11.8cmほどの中形の壺である。口頸部は内傾し、口縁部がかるく外反している。体部との境は明瞭である。口頸部～体部の外面は横方向の細かいヘラミガキを施し、口縁部内面もミガキを加えている。それ以下の内面は削り調整である。胎土は砂粒を多量に含んだ粗いもので、色調は黒色を呈する。**S E02東側の近世攪乱中から出土した。**

4 小結

本調査で検出された遺構・遺物は、大きく2つの時期にわかれる。1つは井戸**S E01**・溝**S D03**であって、ほぼ11世紀後半～12世紀のものである。いま1つは、調査区全体に検出された掘立柱建物群で、それには井戸**S E02・03**・溝**S D01・02・04・05**、土塙**S K01・02**などが伴う。建物の出現・消滅とも明確にはしがたいが、おおむね16世紀～17世紀と考えられる。

いま少しく仔細にみておきたい。**S E01**の埋没は、下層出土土器にみられるように、大宰府
⁽⁴⁾編年の**S D1330**期にあたる。上層出土土器には、外底系切りの土師器、龍泉窯系青磁I類なども入っており、上層の埋没が12世紀前半～中頃にあることをしめしている。またこの上層や**S D03**の出土土器に、新しい段階の輸入・国産陶磁器がみとめられるが、これは遺構の著しい重複から、混入したものと思われる。この段階の遺構は、建物群造営時の地下げ盤地によって、ほとんど削平され消滅したのであろう。

掘立柱建物は、その平面的規模の全部、あるいは一部を確認したるもので12棟がある。それでも、柱穴掘方と想定されるピットの半分強がまとまつにすぎない。そのなかで、建物の重

複数をみると、例えばSB02では8棟の建物と重複している。この地区で間断のない造営とみて、1棟を20~25年とする耐用年数の単純計算でも、相当な長期にわたる宅地としての使用が想定される。この時期に通有なように、建物の柱穴掘方は小さく、仮りに重複していてもその先後関係を明確に覚えることは難かしい。この調査区のはあいも、いくつかの好例をのぞいては、判別しえなかつたものが多い。

いま、溝・土塙・柱穴掘方などの出土遺物から、この建物群の上限を考えると、李朝陶器、明染付、白磁、美濃系灰釉陶器などからほぼ16世紀の初め頃に求められるようである。下限は伊万里系の染付で、17世紀前半の製品までが柱穴掘方に入っている。したがって17世紀前半以後となる。

建物の平面形では、大きく3種に分かれる。1. 2×3間、あるいは2×3間以上の長方形プランで、桁行柱間の大きいもの(SB02・06・08)。2. 2×3間であるが、桁行柱間が狭く正方形に近いプランのもの(SB01・07・09)。3. 1×1間の小規模建物(SB10・12)である。1と2の建物を比較したばあい、1が東西棟建物で概して規模が大きく、2は南北棟建物で1よりも小規模である。いくつかの柱穴掘方の重複からは、1の建物が2よりも後出するようである。

また、調査区のなかで重複しない建物もいくつかある。建物の方位でみるとSB01と05、SB03と04、SB02と10などは、同時期に併存して宅地を構成した可能性もあるが、断定しうるところではない。

SB03の南側とSA03の東側には、ほとんど建物がみとめられず、井戸があるにすぎない。こうした配置は、この地区が一つの宅地として継続して使用された可能性をしめすのではないかろうか。

註1 福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書(6)」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集)1980

註2 以下、青磁・白磁の分類は下記文献による。横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(九州歴史資料館研究論集4)1978

なお、分類にあたっては、横田・森田氏の教示をえた。厚くお礼申しあげる。

註3 以下、施釉陶器、染付磁器については佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康治氏、佐賀県教育委員会文化課 東中川忠美氏の教示をえた。厚くお礼申しあげる。

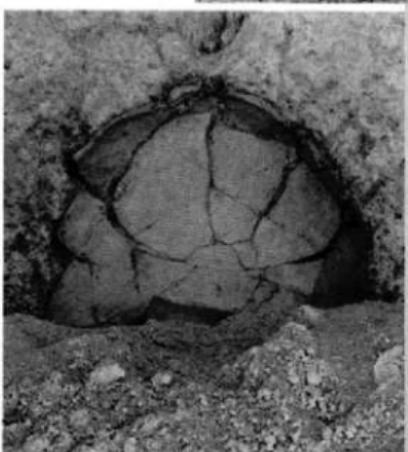
註4 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚書」(九州歴史資料館研究論集2)1976、森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚書(2)」(九州歴史資料館研究論集3)1977、および註2文献

図 版

PLATES



1. 調査区全景
(西から)



2. K01 出土状況



3. K01



1. 調査終了全景（南々西から）



2. 調査終了全景（北から）



1. S001およびS02(南から)



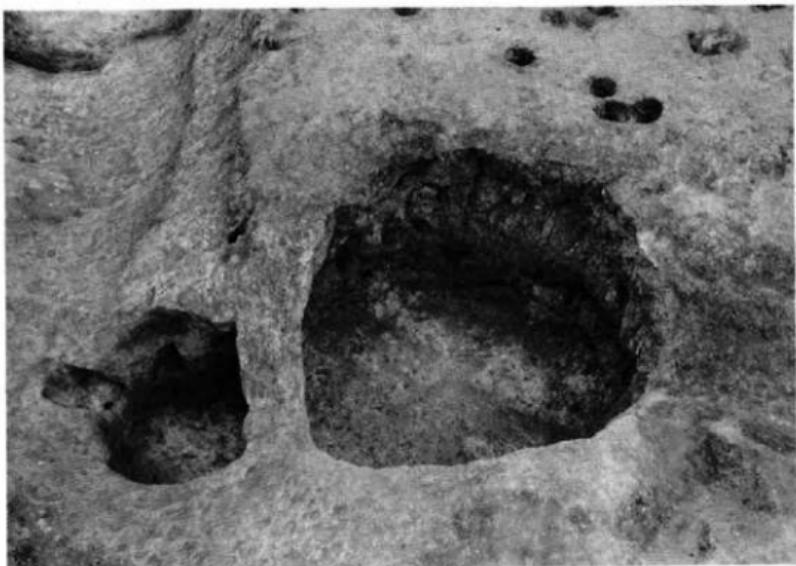
2. SX01(西から)



1. SX01と柱穴群（南から）



2. SX02 (南西から)



1. SX02 (南から)



2. SX02 (玄室から鼓門部をのぞむ)



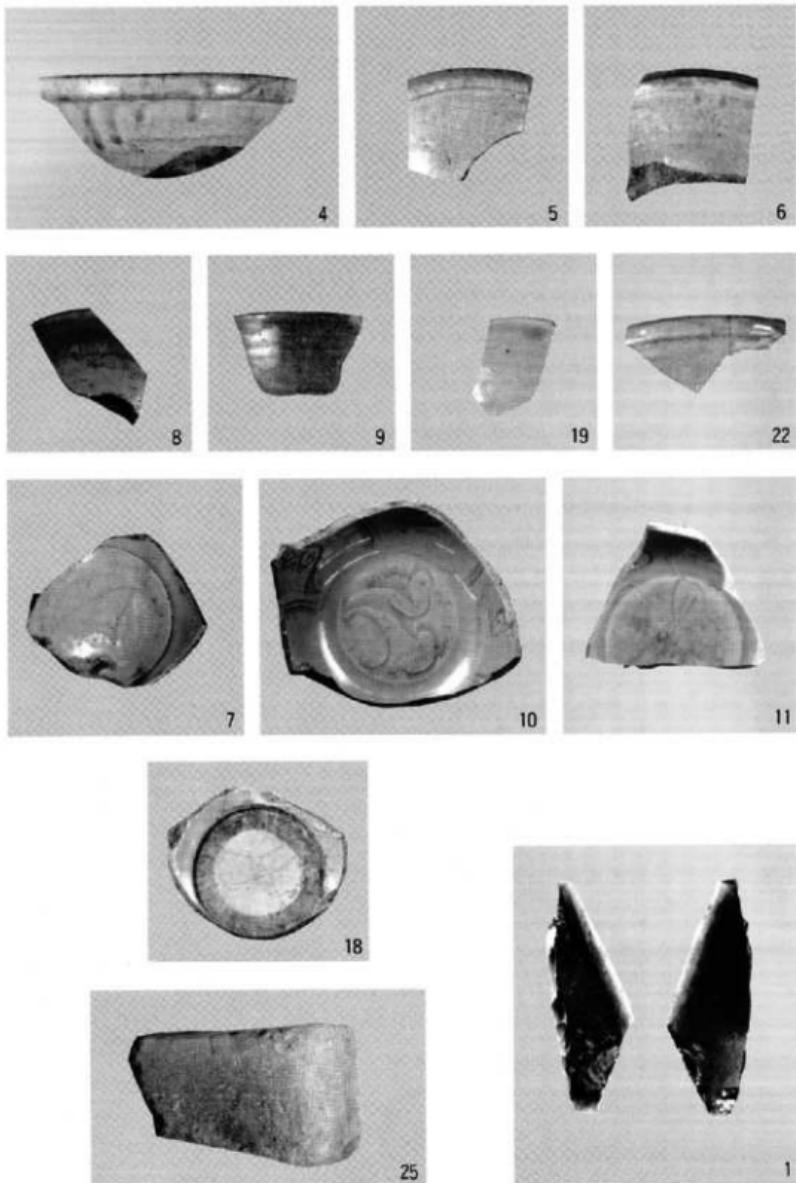
2. SX03 壁坑部（南から）



3. SX03 (西から)



1. SX03 (立室より壁坑をのぞむ)





1. 調査前現況近景（東から）



2. 調査終了全景（東から）



1. 調査終了全景（東から）



2. 調査終了後全景（南から）





1. 井戸および柱穴群、SD01（北から）



2. SD01, SE01~05（南から）



1. SD01 土層断面（北から）



2. SE01 (東から)





1. SE02 (東から)



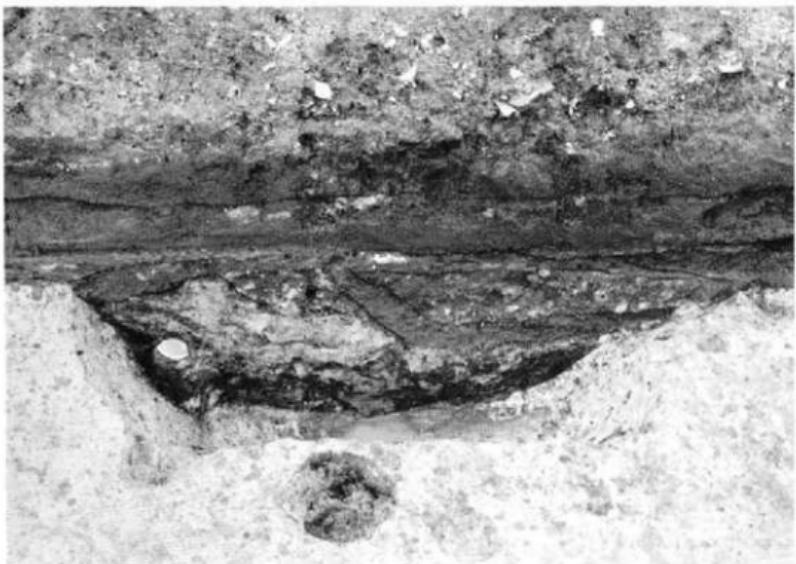
2. SE03・04 (東から)



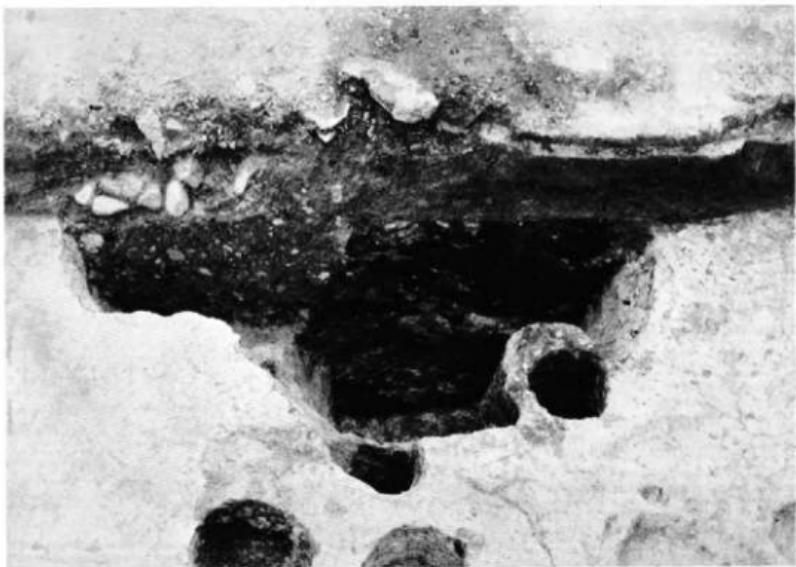
1. SE04 木製桶出土状況



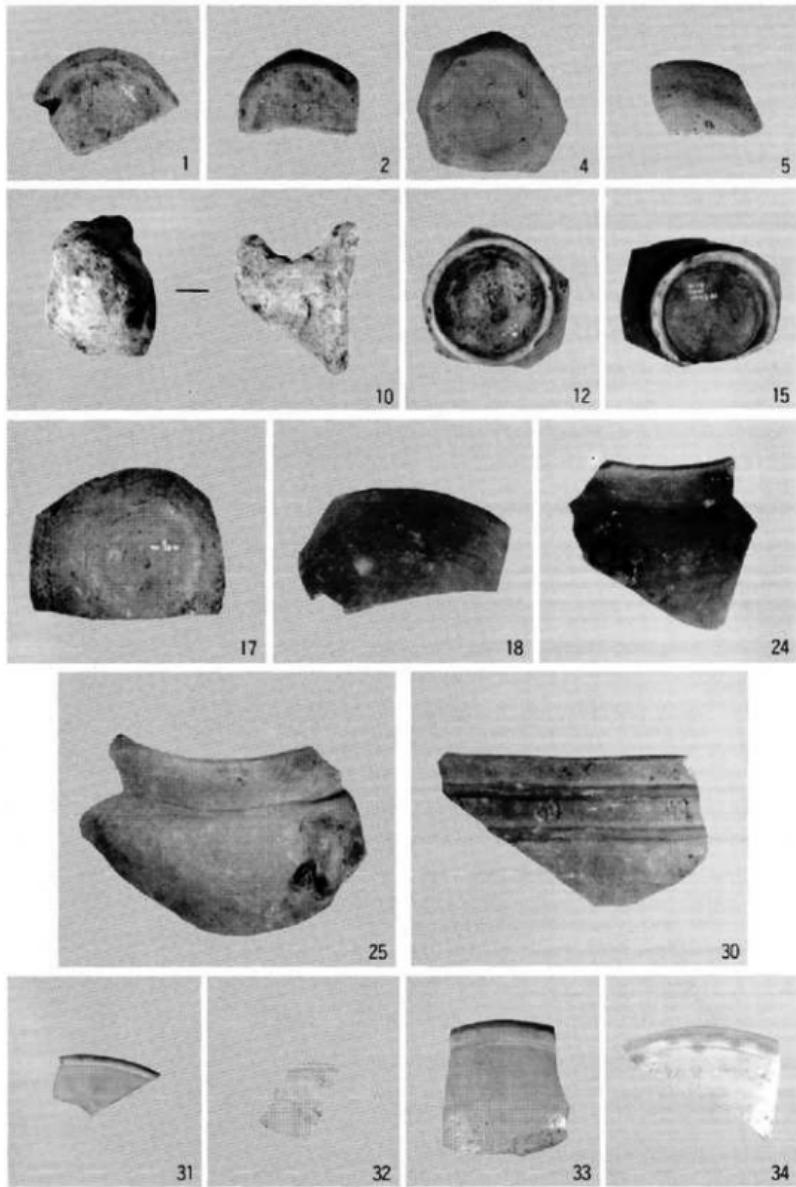
2. SE04 棟組状況



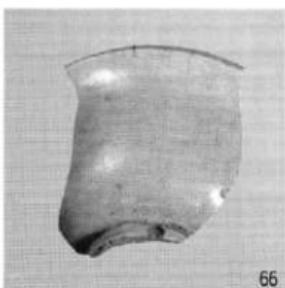
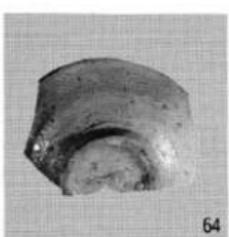
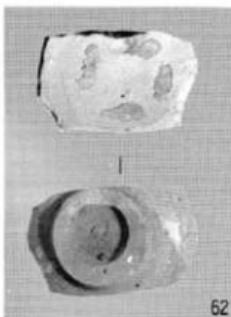
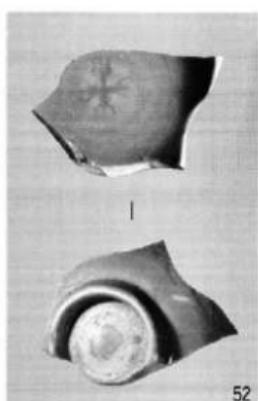
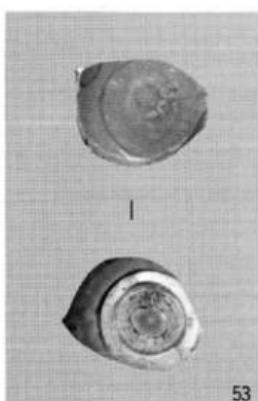
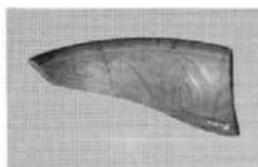
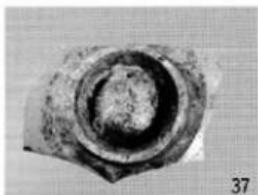
1. SK01 (東から)

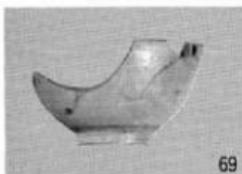


2. SK02 (北から)



出土土師器・瓦器・白磁





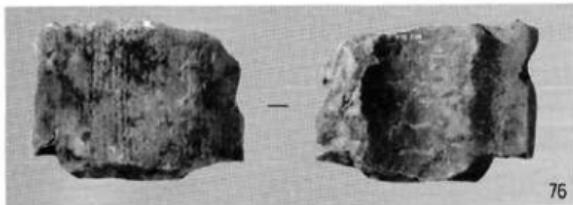
69



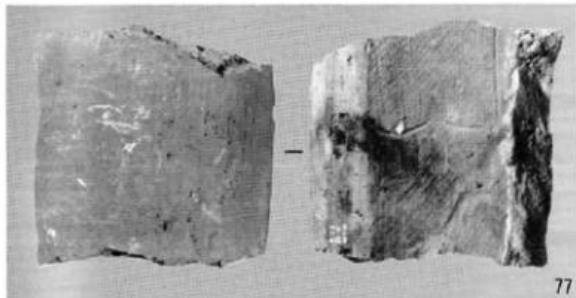
71



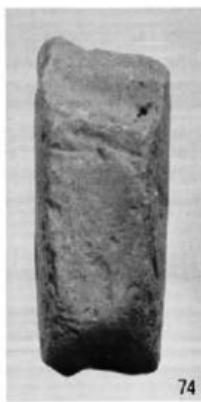
72



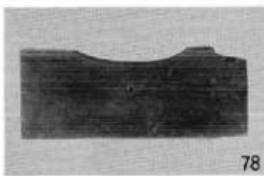
76



77



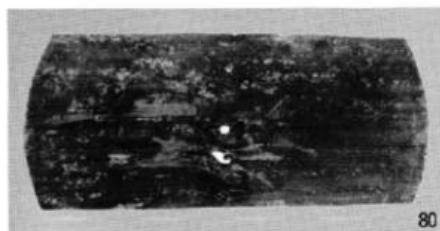
74



78



79



80

出土石製品・瓦・木製品



1. 調査区全景（調査前・南東から）



2. 調査区全景（東から）



1. 捜立柱建物群（北から）



2. 捜立柱建物群（南から）





1. 井戸SE01・02（左がSE01・南から）



2. 井戸SE03（北から）

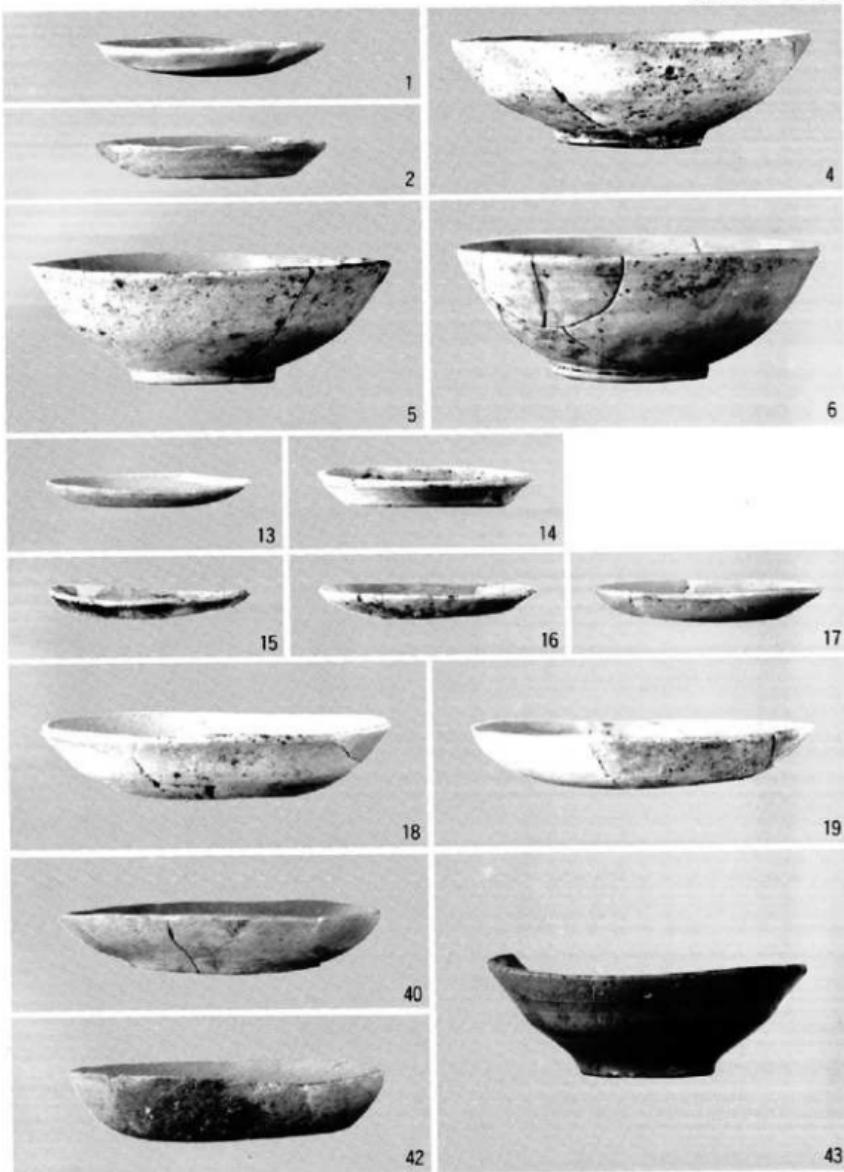




1. SE03-04 (南から)

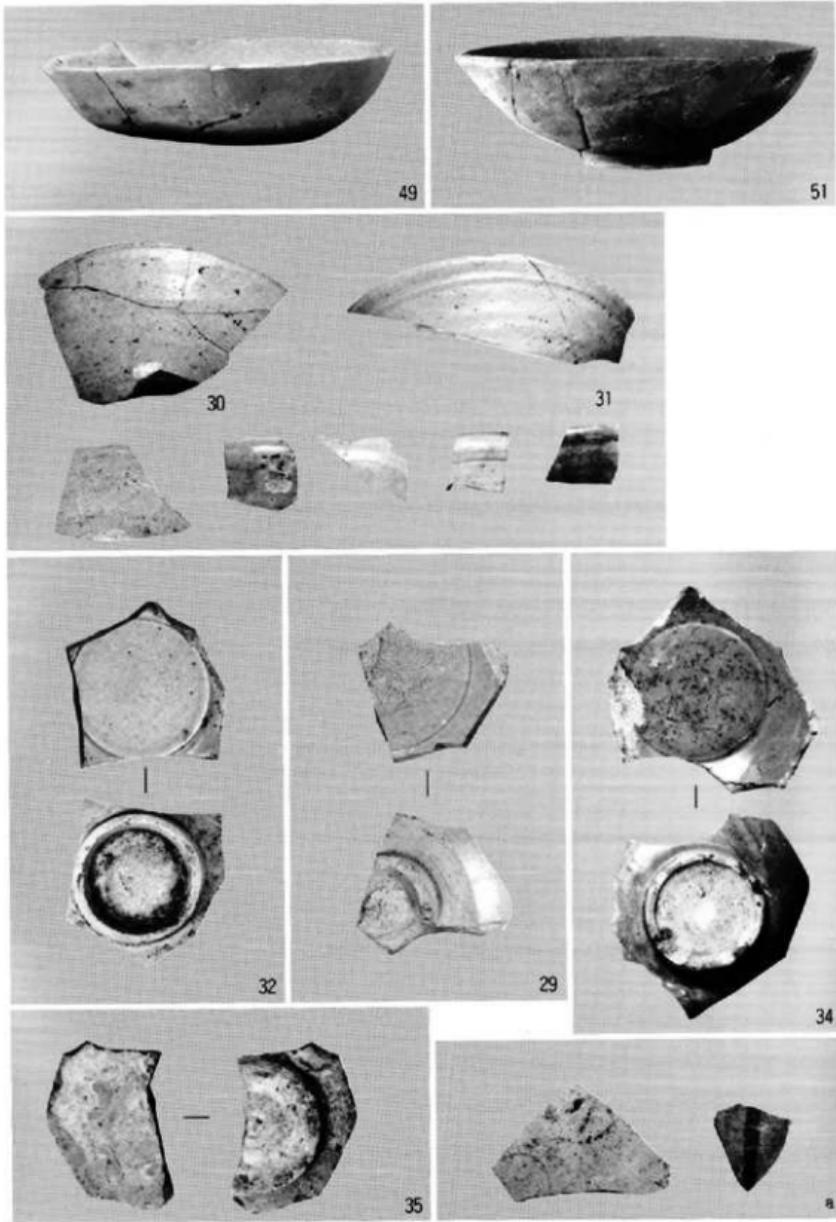


2. SD01 (東から)



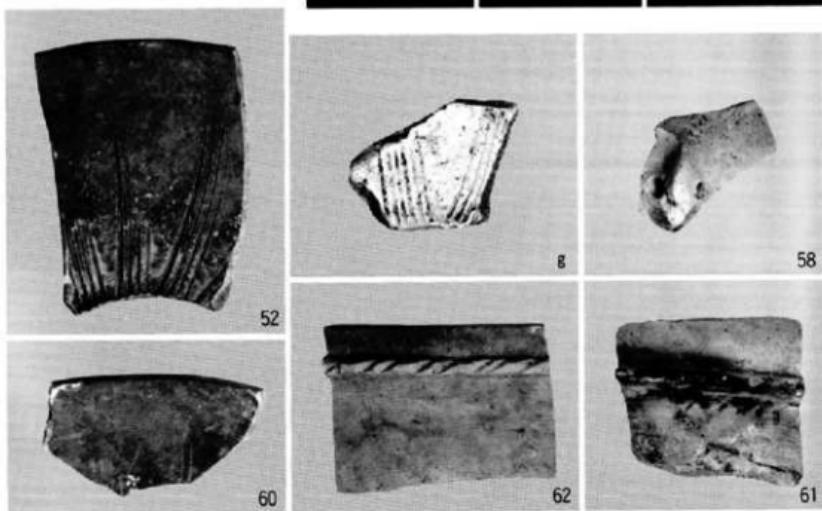
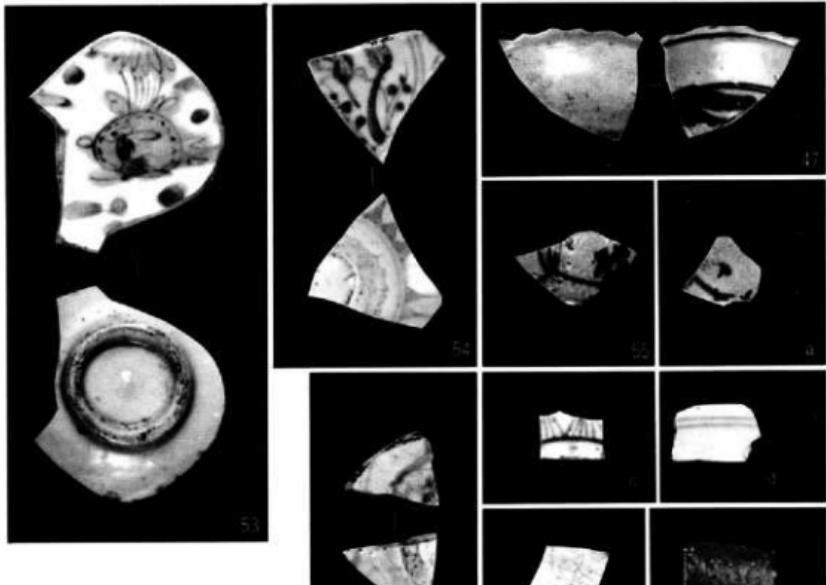
SE01下層(1~6) SE01上層 (13~19) SE03(40~43)





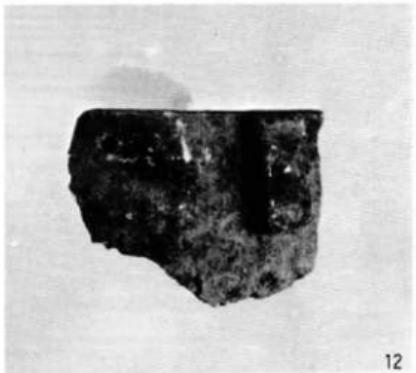
SD03(49・50) SE01上層(29~35・a)





SD01(47-g) SD03(52-e)
柱穴攝方 SB01(61) SB05(a) SB08(b) SB10(62) ピット1(60)
SB02(54) SB07(c) SB09(53-58) ピット2(55)
ピット3(f)





SE01下層(12)
SD01 (48) a (SE03井戸枠)
 b (SE03井戸枠)
 c (bの拡大)
 d (SB08柱根)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第65集

板付周辺遺跡調査報告書 (7)

1981年3月31日

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8の1

印 刷 秀巧社 印刷株式会社

